

2015年度 地域課題の総合的探求プログラム



- 1年次「地域課題入門」
- 2年次後期「地域課題特論ⅠA」
- 3年次前期「地域課題特論ⅡA」
- 3年次後期「地域課題演習」
- 4年次前期「地域課題研究」

茨城大学 人文学部

2016年3月

人文学部「地域課題の総合的探求プログラム」について

茨城大学人文学部では、2012(平成24)年度から、「地域課題の総合的探求プログラム」を設置しました。

これは、各学生が、学部・学科・コース・ゼミで自らの専門分野を学ぶのと並行して受講するカリキュラムで、「専門的な知見に基づき、総合的な判断のできる地域リーダーを育てる」目的で開講するものです。

このプログラムを履修する学生は、関連の科目や、自らの専門分野の科目のほかに、プログラムの必修科目として、以下の授業を受講します。

1年次集中講義	「地域課題入門」
2年次後期	「地域課題特論ⅠA」
3年次前期	「地域課題特論ⅡA」
3年次後期	「地域課題演習」
4年次前期	「地域課題研究」

本プログラムの1期生は、2015年度に4年次前期「地域課題研究」を受講し、自分たちの選んだテーマに沿って「提案・提言」の発表会を行いました。

2015年度には、2期生にあたる3年次生が、前期「地域課題特論ⅡA」を受講後、後期「地域課題特論ⅠA」を履修しました。また、3期生にあたる2年次生は、後期「地域課題特論ⅡA」を受講。1年次生向けには「地域課題入門」を開講しました。

以上のように、本年度をもって1年次生から4年次生までの本プログラムの全ての科目が開講されるようになりました。学生たちは1年次から、学生本人の選択によって、積み上げていく形で学んで行き、最終的には「プログラム修了」の認定を受けます。



1年次「地域課題入門」

1年次生向け「地域課題入門」は、教養科目・総合科目の集中講義として、常陸大宮市の協力の下、毎年、開講してきましたが、2012年度からは、人文学部「地域課題の総合的探求プログラム」の導入科目として位置づけられるようになり、常陸大宮市とともに、茨城県庁にも協力いただくようになりました。

2015年度は、63名の学生が受講し、以下の日程で行われました。

- 1日目 2015年8月8日 常陸大宮市での授業1(西野)
- 2日目 2015年9月24日 茨城県庁での授業(小原)
- 3日目 2015年9月28日 大学での授業(井上、西野)
- 4日目 2015年9月26日 常陸大宮市での授業2(西野)

1日目と4日目は、常陸大宮市と茨城大学の地域連携協定に基づく「常陸大宮キャンパス」として、常陸大宮市市民協働課や、「常陸大宮市まちづくりネットワーク」の市民のみなさんご協力のもとで、実施しました。

まず1日目は、常陸大宮市・美和工芸ふれあいセンターで、「常陸大宮市まちづくりネットワーク」のみなさまに講師になっていただきました。

午前は、美和地域の活性化に取り組む「森と地域の調和を考える会」の方々に、「木の駅プロジェクト」「高部館ほか山城整備」などの活動についてお話をうかがい、その後、みなさんに説明、ご案内をいただきながら、学生たち自身が美和のまちを歩きました。

午後は、2014年に1回目が開かれた「ウダーベ音楽祭」実行委員のみなさんから、廃校になった学校も含めて市の全校の小学校の校歌を歌う会「ウダーベ音楽祭」の企画、実施について、また、2回目にあたる今年度の準備の進行状況についてお話をうかがいました。

昨年度も本授業の学生たちから、「ウダーベ音楽祭」に関して提案を受け、それを実際にとりいれて、「校歌のクイズ」「常陸大宮市の魅力を地図に書き込むコーナー」「給食の思い出を書いてもらう企画」などが学生たちの協力によって実施でき、当日のプログラム内容が広がったこと、今年度も学生たちからの提案がほしいとお話があり、班ごとのワークショップを行いました。

1時間弱のワークショップで、9つの班から、積極的な提案が出され、実行委員会の方々は、それを持ち帰って検討し、4日目にまた学生たちと意見交換を行うことになりました。

授業2日目は、茨城県にお世話になり、県議会の傍聴、県庁内の見学・研修、その後、本学卒業の県庁職員お2人に講義をしていただき、ワークショップを行いました。

3日目は、大学での講義。午前は、あらためて、地域を学び、考

えていくための基本的なことからポイントを学びました。午後は、内閣府「まち・ひと・しごと創生本部」が本年4月より提供をはじめたビッグデータ「RESAS(地域経済分析システム)」について、概要等を説明後、実際に、データベースに接続して使ってみました。

今後は、自治体も民間も、このようなデータベースを活用しながら、現状分析や政策立案、まちづくりの企画等に取り組んでいくことを理解してもらい、本授業の最終課題でもこれらのデータを使用すること、各自でデータ等を収集しておくことを課題にしました。

4日目(最終日)は、JR常陸大宮駅で集合。常陸大宮市までのアクセスを実感してもらうとともに、駅前からまちを歩いて、会場の常陸大宮市文化センターへ向かいました。

本日も「常陸大宮市まちづくりネットワーク」の市民の方たちに講師をお願いし、常陸大宮市での「市民によるまちづくり」についてお話を聞きました。

その中で、本授業1日目の学生たちの提案を受けて、10月に開催する「ウダーベ音楽祭」で「給食カフェ」を開くことになり、準備を進めていること、当日に向けて、学生たちへも協力の依頼がありました。

その後、9班に分かれて、「常陸大宮市にどうしたら、外から人を呼び込むことができるか」という課題で、ワークショップを行いました。ワークショップでは、「RESAS」等のデータに基づいて現状の分析を行い、そこから提案を考えて行くことを条件にしました。

各班の提案は、最後に、模造紙にまとめ、口頭による発表を行って、市民協働課職員や、「常陸大宮市まちづくりネットワーク」の市民代表、茨城大学社会連携担当理事から、講評のコメントをいただきました。

9班の提案は、授業の終了後、常陸大宮市市役所ロビーにて掲示し、広く市の職員や市民のみなさまに見ていただくことができました。

また、10月18日の「ウダーベ音楽祭」では、本授業受講の学生たちが「給食カフェ」のお手伝いを行い、なつかしい給食のメニューを来場のみなさんに味わっていただき、音楽祭の企画をもちあげました。



1年次 地域課題入門

A班

I.Y I.K N.M I.C F.E O.S N.T

1事業名称 疲れた体を大宮で癒そう!!

2事業目的

ゴミゴミした都会の中で騒音や人ごみで疲れきった身体を自然たっぷりのこの地で過して癒されてもらい、常陸大宮市民と触れ合ってもらうことで常陸大宮市の良さを知ってもらおう。

3事業概要

・常陸大宮市ではホテルなどの宿泊施設が少ないため宿泊施設の代わりとして民泊を取り入れたツアーである。宿泊先で市民の方々とBBQ・つり・ハイキングなどを行い常陸大宮市の自然や人々の優しさに触れてもらう。また、西塩子の回り舞台や駅前イルミネーションの時期に合わせたツアー、常陸大宮市の面積の6割が森林であるという特徴を生かした紅葉風景を楽しんでいただくツアーなど、常陸大宮市でしかできない経験を提供できる内容を盛り込む。

- ・ターゲット:家族連れ
- ・PR方法:観光会社との連携

B班

I.M I.K S.S S.Y S.Y H.K H.M

帰省促進プロジェクト

目的

市外に出ていった人々が常陸大宮市に戻ってくるようにし、またその取り組みを通じて外部の人が市に興味を持ってくれるようにする。

基づいたデータ

RESAS「人口の社会増減 地域ブロック別純移動数」

これより、市外へ転出してしまおう人たちの多くが、近くである北関東への転出であることを踏まえ、近辺の都県からならば比較的簡単に帰省ができることに着目し、帰省のタイミングを活かした活動を行うことが効果的であると考えた。

概要

a.時期

お正月、成人式など帰省が盛んな時期

b.内容

お正月にもちつきや凧揚げ、羽根つきなどのイベントを開く。また、景品として市内で使える商品券などをつける。

c.宣伝方法

- ・同世代の若者が一度に集まる成人式でメーリングリストを作成し、お知らせを送る。
- ・回覧板など、地元に残っている家族にまず情報を伝え、そこから市外、県外の家族に伝えてもらう

C班

M.E N.M M.I M.O C.H A.S

『道の駅』の活用法

→通過点から目的地へ→

- 目的:袋田の滝(大子町)や竜神橋(常陸太田市)に行く観光客に常陸大宮市に立ち寄り、滞在してもらうために行う。(遠方の人の他に水戸など、茨城県民も)
- データ情報:滞在人口(、耕作放棄地)

①道の駅に宿泊施設を併設する(夏はキャンプ)

畑を併設し野菜の収穫・魚(鮎など)を獲る体験をする。



夏:BBQで食べてもらう(野菜・魚・瑞穂牛)

冬:秋そば・魚・郷土料理



※鮎

②農業体験ポイントカード制

作物名:サツマイモ	
植える	収穫
スタンプ	スタンプ

植えるとき、収穫のとき、それぞれでスタンプを押してもらう。2つもらった人は、収穫したものを無料でプレゼント。→リピーターを増やす!

③遠足等で利用してもらう

定期的な人を集めるため → ターゲット:子ども → 遠足の行き先に

併設の畑で子ども達に収穫体験をしてもらう。

または工芸体験(季節の野菜、そば打ち体験など)



その農作物で料理、加工

作ったものを風呂敷に包みプレゼント



1年次 地域課題入門



『ひと穫りいこうぜ！常陸大宮』

D班



D班 I. A M. T T. Y Y. T T. N

〈目的〉週末を利用して、農業の楽しさ、すばらしさを知ってもらおう。
常陸大宮を週末に帰る第二のふるさとのように憩いの場を感じてもらおう。
週末農業に関わる農地の管理、施設の運営などが新たな雇用を生み出し経済的発展を見込む。

〈データ〉耕作放棄地・・・35.73% ←もったいない！有効利用したい！
(RESAS-地域経済分析システム-<https://resas.go.jp>)

〈内容〉

① 長期プラン(がっつり農業をやりたい人向け)

- 年間を通して週末を利用した農業
- 宿泊施設完備 常陸大宮の野菜を使った食事つき！
- 秋には収穫した野菜を地元のシェフたちが調理してくれるイベントを開催！
⇒自分が作った野菜がプロの手により立派な料理に様変わり！⇒嬉しい！達成感

② 短期プラン(親子連れのおすすめ)

- 3連休・長期休暇などを利用して！
- いちほり・稲刈りなど単発のイベントに気軽に参加できる！

夏休みの自由研究にも

おすすめ！

〈アピールポイント〉・・・笠間や千葉で開催されている週末農業と差をつけるために！

- 常陸大宮の歴史ある町並みをプチ探検できるウォークラリーや大自然を生かしたアスレチックで農作業の息抜きに親子で楽しめる！
- ゲーム「モンスターハンター」風に編集した宣伝VTRをつくりYouTubeやホームページに掲載
- ネット予約可能！ホームページから予約可能。日にちごとに空き情報も見られる！
- 講師の農家さんの紹介映像をホームページに掲載する。

〈PR方法〉

- 常陸大宮には公共交通機関があまり開通していない。週末農業へ訪れる人は車で来る人が多いのではないかと。
→車好きな人にアプローチするため車雑誌に広告を載せてもらう。ラジオで宣伝する。
常陸大宮に『手軽に来られる自然豊かな場所』のイメージを！
- 保育園や小学校にチラシを配布。
- 農業雑誌に広告を載せてもらう。
- 地元紙に「孫に農業体験させてみたくないですか？」というキャッチコピーのもと宣伝し、市から出て行った若者をその家族の呼びかけによって帰省を煽る。

G班

日本最古の回り舞台にふれようProject

O.K S.N M.K O.S S.M N.S

目的:西塩子の回り舞台の製作やお手伝い・子供歌舞伎とのコラボ
⇒常陸大宮の人々(日本人)とのコミュニケーションをはかる場を提供でき、また常陸大宮でしか体験できない日本文化にふれることができる!!

データ:RESAS→観光マップ→外国人訪問分析⇒常陸大宮には外国人があまり来ていない。

具体例:日本文化を体験→奥久慈漆・和紙・浴衣・お風呂・イベントの運営
(ウダーベ音楽祭・夏祭り・駅前のイルミネーション)
呼びこみ方:各大学に協力をはかり、協定校に留学希望の募集を呼びかけてもらう。

E班

Y.A U.T T.A I.M T.K K.H

みーつけた!! ~ありのままの常陸大宮~

目的:新しいものを作るのではなく、今あるものをフル活用する。

データ:人口が少ない、減少している。
利用可能な施設がある。
ターゲット:都心の小学生とその家族

事業内容:バスツアー(行き帰り、道中の移動など全て同じバスで)
[例]
ウォーキング[常陸大宮名物(瑞穂牛や柚子ジュース、柚子ワインなどの)の食べ歩き]
→宿泊するキャンプ場(もしくは廃校)でBBQ
→温泉
→キャンプ場に戻り、星空観察

常陸大宮は廃校になってしまった学校が多数存在しているのです。その建物やグラウンドを利用することでコストカットにつながり、また、小学生にとって学校に泊まるという一度は体験してみたいであろう経験をすることができる。

伝達方法:小学校に広告を配布する。

F班

I.N O.T K.A T.A N.A

外国人アーティストと大宮市民の融合

来年秋に行われる県北国際アートフェスティバルをきっかけに大宮市民が地元に戻ってきたいくなるような街づくりを実施する。

県北国際アートフェスティバルでは外国人アーティストの集客も見込まれており、これを機に外国人と大宮市民が一緒になってアートを利用したテーマパークを作ったり、駅前をアートで飾り魅力的な町並みを作るなどしていく。
常陸大宮をアートの街にするため、地元をでていった美大生や美術を仕事にする人などにもプロジェクトに対する協力を呼びかけ、常陸大宮から離れてしまった人が地元に戻ってくるきっかけにもなると考えた。

テーマパークについては自然を利用した遊具など常陸大宮の魅力を活かしたものにしたいと考えており、遊び場が少ない常陸大宮において多くの人を楽しめる施設となるようにしたい。

SNSなどで自発的に情報発信するのみならず、「田舎とアート」といった意外性を売りにマスコミからの注目を集めようと考えている。

2年次「地域課題特論 I A」

2年次後期「地域課題特論 I A」は、茨城県にご協力いただき「連携講座」として、2013年度にスタートしました。

今年度も、授業全体を茨城県に全面的にバックアップいただき、企画課の職員の方たちを中心に、企画、授業運営、講師をつとめていただきました。

茨城県の重点課題である「県北地域の振興」「地域づくりを支える公共交通」という2つのテーマを中心に置き、概論・各論、現地実習・意見交換・学生による課題発表という組み立てで行いました。

授業では毎回、ワークショップを行いました。特に、10月14日と28日は、内閣府「まち・ひと・しごと創生本部」事務

局から「RESAS(地域経済分析システム)」の担当職員2名に来ていただき、全国の大学でははじめての「RESAS出前講座」を実施していただきました。この「出前講座」には、本授業の受講生全員のほか、関心のある学生・院生にも広く参加を呼びかけ、計60人の学生が参加しました。

現地での実習は、県のほか、ひたちなか海浜鉄道、日立市等にもご協力をいただき、ひたちなか海浜鉄道のさまざまな取り組み、常陸多賀駅で行われている「茨城県北クリエイティブプロジェクト」(リノベーションによるシェアオフィス等の取り組み事例)を現地で学びました。

北茨城市の観光をバスで救えるか

A班

地域課題特論
A班

目次

- ・現状と課題
- ・現地調査とそこからわかったこと
- ・なぜ遠方から観光客が来ないのか
- ・バスを増やそう!!
- ・バス以外での課題解決方法
- ・参考文献

現状と課題

○観光滞在人口
平日: 県内63300人
県外 9100人 / 計72400人

市	滞在人口
1 日立市	7200人
2 日立市	6900人
3 鹿嶋市	4800人
4 北茨城市	1100人
5 常陸太田市	700人
6 高萩市	700人
7 ひたちなか市	600人

現状と課題

○観光滞在人口
休日: 県内64000人
県外 7400人 / 計71400人

市	滞在人口
1 日立市	5800人
2 日立市	5700人
3 鹿嶋市	5600人
4 常陸太田市	1900人
5 高萩市	800人
6 常陸大宮市	600人
7 ひたちなか市	500人

現状と課題

○データから分かること
平日・休日ともに、近隣の市町村や県内の市町村がほとんど
平日よりも、休日の方が滞在人口は少ない
→ 北茨城市に観光で訪れている人は少ない
→ 遠方・車のない人が少ない
→ 市内の交通が充実していない=バスの問題

北茨城市の3つの駅とその周辺
・大津港駅(水戸から約1時間)

・磯原駅(水戸から約55分)

・南中郷駅(水戸から約50分)

・五浦美術館

・最寄駅(大津港)から徒歩で約50分
→ 歩道はよく整備されているが広い
→ ゴミのポイ捨てが多い。
→ こみぎ不足?
→ 車で利用できる休憩所がない?

・三駅の共通点

- ・駅から出るバスの本数が少ない。(土・日・祭日運休)
- ・国道と駅は近い。
- ・駅周辺よりも国道沿いの方がごわいがある。

車がないと観光できない。

バス停の数

北茨城市 129
ほか県北地域

常陸大宮市	151
常陸太田市	546
日立市	355
高萩市	127
大子町	186

下から2番目

人口×バス停の数(少ないほうがよい)

北茨城市 約354
ほか県北地域

常陸大宮市	約283
常陸太田市	約96
日立市	約355
高萩市	約231
大子町	約97

下から2番目

全国との比較(バス停の数)

北茨城市	129
同じくらいの人口	
長崎県雲仙市	143
同じくらいの面積	
静岡県沼津市	528
東京都八王子市	605

全国との比較(何人ごとにバス停)

北茨城市	約354
同じくらいの高齢者率	
北海道浜中町	約62
千葉県山武市	約297
同じくらいの交通事故発生率	
山形県小国町	約82
青森県下北郡風間浦村	約94

バスを増やそう!!

●観光系バスの導入
駅から観光地(六角堂や天心美術館など)を回り、宿泊施設へ

○高ルート
駅→大津港→天心美術館→六角堂→大観の浦→宿泊施設

○山ルート
駅→花園深谷→ガラス工房シリカー→中郷温泉→宿泊施設

参考: 北茨城市観光協会観光モデルコース(山コース)

バス以外での課題解決方法

バスの導入にはコストがかかる
→ レンタサイクルの導入
愛媛県今治市の事例
・しまなみ海道自転車歩行者専用道路の活用
・道の駅などでのレンタサイクルターミナルの整備
・平成26年度では約5万人の利用
→ レンタサイクルで観光地などを回る

参考文献

北茨城市観光協会HP <http://www.kibitour.com/kankoukyokai/>
今治市観光協会観光部 資料 http://www.kankoukyokai.com/kankoukyokai/2730kumai_C1/
RESAS観光マップ From 40分(滞在人口)
<https://resas.aff.jp/>
常陸東部ホームページ
各自治体のホームページ
バス路線表
「国土交通省」(バス等利用データ)国土交通省(平成22年度)
Yahoo!Fバーネットワーク - 地図/バス/ロード
Google マップ - 地図検索

ご清聴ありがとうございました!!

本物に出会えるまち
北茨城市

北茨城市観光協会

観光バス

観光バス

北茨城市観光協会

観光バス

観光バス

授業スケジュール

1回	オリエンテーション
2回	茨城県と茨城県庁について
3回	概論 茨城県の特性と将来像(概論)
4回	①地域づくりを支える公共交通
5回	各論 ②県北地域の振興
6回	③茨城大学周辺地域の変遷～近代以降～
7回	
8回	現地 ・ひたちなか海浜鉄道
9回	視察 ・常陸多賀駅(県北クリエイティブプロジェクト)
10回	
11回	・意見交換
12回	意見交換 ・データの収集・分析
13回	発表準備 ・資料準備
14回	発表 ・発表会
15回	まとめ

最終課題は、「公共交通」の問題・課題を念頭に置きながら「県北地域の振興」に資する「提言」を考えるというもので、「RESAS」のデータを活用して現状分析を行うことも必須としました。

学生は3班に分かれ、それぞれの班で「提言」をまとめました。

発表は、県庁企画課、県北振興課で、実際に、「県北地域の振興」や「公共交通」を担当する職員の方たちが聞いて下さり、各班へアドバイスをいただきました。

どうしたら工業のまち日立に若者が増えるか

B班

目次

- 現状
- 若者が流出する要因
- 若者が集まらない要因
- 3人それぞれの仮提言

現状

- 年齢別人口推移(人口ピジョン)
- 社会減が2年連続で全国2位
- 経済・産業データ(RESAS)

年齢別人口推移(人口ピジョン)

社会減2年連続全国2位 (H25年、H26年)

茨城県議員井手義弘HPより
<http://blog.hitachi-net.jp/archives/51492797.html>

工業分野は強そう

RESASより

日立市に住んでいて個人的に感じた事

- 大学進学時にみんな出ていく
- 誇りが持てない
- 子供会
- 娯楽施設、文化施設が少ない

要因 市外への流出

- 就職・大学進学を機に市外へ
 - ・希望する職種がない
 - ・適当な教育機関がない
 - ・都市、一人暮らしへの憧れ

要因 市外への流出

- コミュニティが希薄

要因 市外への流出

- コミュニティが希薄

要因 市外への流出

- コミュニティが希薄

○家族関係の良さ
○地域との交流 → 地元への愛着

交流の場、コミュニティがない
まちに魅力を見いだせない
地元に関心 向かない

↓

地元に残らない、戻らない

要因 人が集まらない

- “工業”のイメージが強すぎる

日立市といえば日立製作

日立市=工業という強いイメージ

↓

若者が興味を持ちそうな魅力のイメージがない
(観光地、ファッション、アート、イベントなど)

→工業しかない、つまらない所?

要因 人が集まらない

- 街の活気がない

商業分野において、若年層を中心に買い物客が市外へ流出し、商店街が空洞化している現状

↓

大切な雇用の場となっていた卸売小売業が衰退

●平成4年が16,447人ピークとし、平成14年までは11,000人を維持していたが、平成11年以降減少を続け、平成27年は1,231人となる

→仕事を求めることが出来ない?

要因 人が集まらない

- 街の利便性が悪い

駅までの徒歩時間が15分以内は25.8%

仮提言

- 工場見学教育
- 地域への関心の持てるコミュニティづくり

仮提言

- 工場見学教育
- 地域への関心の持てるコミュニティづくり

常陸大子駅前商店街の活性化

地域連携特論IA C組

1. 動機

- 常陸大子駅前商店街の現地視察
→空き店舗利用
リノベーションを学ぶ

↓

常陸大子駅前商店街にも当てはめられる

2. 大子町における課題の発見

① 若者の雇用創出

1980年
20~24歳の若者人口40%減少
→25歳~29歳になると流出人口の30%が回復

2010年
20~24歳の若者人口30%減少
→25歳~29歳では流出人口の10%しか回復していない

若者の雇用創出で大子町へのUターンを!!

② 袋田の滝

紅葉シーズンの秋は渋滞が深刻である

(理由)
・主な道が首都圏からだと118号線しかない点
・車のほうが安くて便利なため高速バスやJRを使わずに来る人が多い点

③ 大子町の人口減少について

1980年: 29,524人
↓
2040年: 10,327人(推定)
・約65%の人口減

出典: RESAS 人口マップ(人口推移)

④ 宿泊客数の過少

観光客の流入客数の状況(観光客二種 観光客動向調査)(単位:千人)

年度	入込客数	日帰り客 (%)	宿泊客 (%)
昭和15年度	1,087	80	20
平成16年度	2,269	114	21
平成19年度	1,918	121	17

大子町にやってくる観光客の内、宿泊はわずか1割から2割のみ

大子町公式ホームページより

3. 設定した課題

常陸大子駅前商店街の活性化

↓

駅前商店街の利用客を取り戻すには?

4. 常陸大子駅前商店街衰退の現状

① シャッター商店街化

- 1960年代→各通りに5つの商店会
- 1972年加盟店舗数: 126店舗 → 現在: 40店舗

3/1に

「駅前から夜更けまで、休む暇もなかった。客存が多くあり、出前の注文もたまった」

飲食店を営む60歳男性

② 経営者の高齢化

- 大子町の高齢者の人口: 総人口の約40%(県内最高)
- 商店の経営者の高齢化
- 若者の減少・流出
- 商店の存続が困難に

5. 常陸大子駅前商店街衰退の要因

① マイカーの普及

- 高度経済成長~マイカーが各家庭に普及
- 車の通行・駐車が困難な商店街
- 買い物客減少

常陸大子駅前通り

② 常陸大子駅利用客の減少

1日あたりの駅利用人数(※東日本調べ)

③ 118号バイパス沿いへの量販店集束

- 大型スーパー進出の計画
- 1979(昭和54)年: 大子町商店会を結成
→反対運動
→町議会も加わり、進出阻止
- 1979年5月大法法の改正→118号バイパス沿いに多くの店舗
→顧客の流出

量販店との価格競争 & 地域コミュニティの希薄化

6. 仮提言

① 常陸大子駅(電車)利用のメリット創出

県内例「もんどころ」券でお得にお買い物

- 那珂湊駅前商店街とひたちなか海浜鉄道との連携
- 鉄道利用者は商店街で様々なサービスを受けられる
- ひたちなか海浜鉄道利用者増

「お宝が自分へ入るかも」

常陸大子駅 常陸大子駅前商店街

② 商店街を日常に取り入れてもらう

常陸大子駅前商店街イベント「大子百円商店街」

- 「らっしゅい」でえご隊」が運営
- 常陸大子駅周辺の商店や事業所が参加
- 100円の商品が店先に並ぶ
- 開催頻度: 3~4回/年
- 商店街に訪れる頻度を高める
- 駅前商店街イベントの開催により力を入れる

③ 駅前商店街に観光的要素を取り入れる

- リノベーション
- 例) Daigo cafe
→築100年以上の古民家をリフォーム
- イベント: アコースティックLive、トークショー
- 大子町のお土産、クラフト作家の作品販売場

新たな大子町PRの場

④ インパクト

- DAIGOとのコラボレーション

参考資料

- 常陸新聞記事(2012/11/21)
- 大子町ホームページ<http://www.town.otsu.ibara.nagasaki.jp/>(最終閲覧日: 2016年1月25日)
- 常陸日本ホームページ<http://www.japan.or.jp/comp/ny/>(最終閲覧日: 2016年1月25日)
- 大子町観光協会ウェブサイト<http://www.otsu-tourism.com/>(最終閲覧日: 2016年1月25日)
- 118号バイパス<http://www.118.or.jp/>(最終閲覧日: 2016年1月25日)
- らっしゅい大子百円商店街Facebook <https://www.facebook.com/118100/>(最終閲覧日: 2016年1月25日)
- daigo cafe Facebook <https://www.facebook.com/daigo.cafe/>(最終閲覧日: 2016年1月25日)
- 常陸公式観光情報サイト<http://www.atsugi.or.jp/visit/visit.html>(最終閲覧日: 2016年1月25日)
- ガルパン応援ひたちなか! <http://gpbhatchekita.net/hitachinaka/index10.html>

■今回の授業を通し、茨城県にまつわる様々なことについて学びました。また、県北地域の問題および公共交通について、グループ学習を行い、課題を発見、解決策を考え、発表をしました。

私のもっとも興味を引かれたものは、公共交通についてです。茨城県はたびたび交通の便が悪い、車がないと動けないと言われます。また、県北地域は私鉄しか通っていない市町村もあり、さらに一時間に一本しかないところもあります。けれども、県はそのことを理解しており、その上で対策を採る、または採らないことを決定していると知りました。財政的問題や民間業者の協力、地域の住民の意識など、行政だけでは改善に乗り出すことは難しい。それぞれのセクターが力をあわせることが必要です。

しかし、グループ学習を通し、3つの気づきがありました。まず一つ目は、本当に公共交通の改善が必要なのか、ということです。茨城県は自家用車が多い。それならば、電車やバスなどの充実ではなく、安全な車の運転ができるように道路の整備を優先するべきでないか。わざわざ公共交通に重点を置く理由とは何でしょう。

二つ目は、この問題はその場所固有のものなのか、それとも全国共通の問題なのかという点です。たとえば、茨城県には公共交通について以外にも多くの課題があると学びました。その中で、茨城県固有の問題とはなんだったのか、私は考えていませんでした。たとえば、少子高齢化は全国でも問題とされています。その場合、茨城県以外にも多くの解決策を考えているでしょう。そのなかで、成功例もあるかもしれません。しかし、茨城県固有の問題の場合、茨城県の過去の事例を見なければいけません。そして、その殆どは失敗したものであるから、現在にも課題が残される結果となっています。そのように、問題がどこにおいてのものかを知らなければ、参考にすべき資料を絞り込めないと理解しました。

最後に、ありきたりな解決策ではいけないということです。私たちのグループは北茨城市の観光とバスについて調べました。そして、課題を元に解決策を考えました。けれども、この解決策は北茨城市固有のものだったのでしょうか。名前を北茨城市ではなく、他の市町村、他の県にしてみても、違和感がない解決策でした。それでは、地域の特色が光ったものとはいえません。どの場所でもできることでは、課題が改善されたとしても、それは一時的なものです。その土地固有の、そこでしかできないことこそ、解決策として考えなければいけないとわかりました。

このカリキュラムを続けて行こうと思っています。来年度はこれらの反省を生かし、より良い学習ができるようにしていきたいです。(A. Y)

■今回この授業を受けてみて、様々なことに興味を持つことができましたと思います。特に、那珂湊と常陸多賀に実地調査に行った経験が印象に残りました。その中で、ひたちなか海浜鉄道さんがどういう役割を果たしているのかと、お客さん呼び込むのにどういった工夫をしているのかといったことを聞いて、とても勉強になりました。

私は生まれも育ちも福島で、大学に進学するまではひたちなか海浜鉄道さんのことは全く知りませんでした。それが、今回このような機会を持って、観光地にお客さん呼び込むのにはどうすれば良いのか、具体的な例に触れることができよかったです。直接関わることがなければ興味の持ちようがないと思うので、このような機会を持ってたことに感謝しています。それは、実地調査の時だけでなく、教室でたくさんの先生方の話を聞いたことでも生かされた

と思います。

特に「リーサス」というものの存在や使い方を教えてくださった授業では、こんなに便利で面白いものがあるのかと、驚きを隠せませんでした。

全国のランキングのようなものだけでなく、地域を指定して、その地域はどのような地域なのか、データで示してくれるものはなかなかないので、発表する上でとても役に立ちました。実習も踏まえ丁寧に教えてくださった先生方に感謝しています。また、そのような興味を持たれたこと・地域の問題点を、自分たちの力で発表したことも今回とても身になったことだと思います。発表する準備にあたり、班の人と関わって精一杯準備したことで、問題意識や解決策といった、普段なら考えもつかないようなことを話し合い、思いついたことはとても身になりました。このような事柄を踏まえ、今後自分なりに勉強したいと思ったことは、なんといつても人のこないところにどう人を呼び寄せるか、これにつきます。観光地があるのにひとが離れてしまうのはどうしてなのか、なぜ人は繰り返しディズニーランド(などの遊園地)に行きたくなるのか、引き寄せる原因は?など、疑問はいくらでもわいてきます。これから先の講義で掘り下げていきたいと思えます。(I. H)

■(1)RESASによる分析

「地域課題特論ⅠA」を受講し、現地調査やグループ研究を行ったがその基盤となったのがRESASによる分析である。RESASの使い方について、実践を伴って学ぶことが出来たということは、今後の調査や研究をする上で大きなアドバンテージになった。RESASによる分析を行うことで研究が抽象的・主観的になることを防ぎ、データによって客観性・説得力をもったものにすることができた。今後卒業研究を進めていくなかでRESASによる分析が必要不可欠なものになるであろう。

RESASが持つ機能の中で最も評価できる点は調査の対象となる自治体と他自治体との「比較」が容易であることだ。これにより問題点の早期発見が可能になり効率的に調査・研究を行うことができるようになったので、授業を通してRESASに触れることができ良かった。

(2)現地調査

現地調査ではひたちなか海浜鉄道と常陸多賀駅前商店街について調査を行った。ひたちなか海浜鉄道は、第3セクターに転換したことによって徐々に業績をあげ黒字に転じるまでもう一步というところまできている。人口減により運営が困難になり廃線になる鉄道が増加している中で、県内にこのような成功事例があることを初めて知り非常に興味を持った。そこでコースゼミにおいてもひたちなか海浜鉄道の成功要因について研究・調査を行った。

出資金について、他の自治体では沿線の複数の自治体が出資を行っている。しかしひたちなか海浜鉄道の場合はひたちなか市とひたちなか海浜鉄道会社のみ、しかもひたちなか市の出資割合のほうが高い。また運営費を除く修繕費等は茨城県とひたちなか市が負担している。つまり他の第3セクター鉄道と比較すると圧倒的に自治体のサポートが大きいということが分かった。この運営に関する負担額の分配は、ひたちなか海浜鉄道の成功要因とすることができると今後も研究・調査を継続したい。また、輸送人員の増加とひたちなか海浜公園の観光客数の増加が一致することから、沿線の観光地開拓が進むことは輸送人員増加の要因となるのか、について

も今後研究・調査をしたい。

(3)グループ研究

グループ研究では「常陸大子駅前商店街の活性化」について研究・発表を行った。課題の発見に至るプロセスや課題の位置付けを事前に明確に行うことで、研究途中で迷子になってしまうことを避けることができるのだと身をもって理解した。

また課題の要因については自分たちの主観が入ってしまい、直接的要因とはいえないのでは、との指摘を受けた。よって要因についてはデータを用い、数字で証明が可能なものでなければならぬと改めて考えた。

仮提言では、①鉄道と商店街が連携した取り組み②より多くの商店街イベント開催③空き店舗利用し観光的要素を取り入れた事業を挙げた。しかしこれらのような話題づくりに終わってしまうような、持続的な効果がみられない取り組みは課題の根本的解決になっていないと研究・発表を振り返って考えた。人の流れを考慮し、課題の根本に作用するような取り組みとはなんであるのか、自らの専門分野である地方自治の観点から今後考えていきたい。(T. A)

■今回、「地域課題特論ⅠA」を受講して、以前から興味があった地域の課題や活性化といったテーマに触れることができ、とても充実した、学ぶことの多い時間だった。

県庁の方から実際に茨城県の各地域が抱える問題を聞くことは、こういった授業でしかなかなかできないことなので、新鮮だった。中でも、内閣府から直々にRESASの出前講座をしに来ていただけたことは、絶対に他では経験できない事だと思い、とてもためになった。夏休みに行なわれた集中講義でRESASは一度使ったことがあったので、ある程度使い方は知っているつもりだったが、改めて開発者の方から直接使い方を教わることで、今まで知らなかったデータの見方や検索の仕方がまだたくさんあったことに驚き、勉強になった。今後、様々な授業を受けていく中でも、とても役に立つツールだと思うので、うまく活用していきたい。

私が講義の中でも特に印象に残っているのは、やはりグループワークである。私は人文コミュニケーション学科で、社会学科の人たちと一緒にグループワークをする機会というものは今までしてこなかったため、全く知らない人同士で一から地域の問題について考えるというのはなかなか話し合いを進めていくのも初めは難しさを覚えた。しかし、何回もグループワークを進めていくなかで、皆それぞれが目をつける観点が違ったり全く新しい意見が出たりと、違う学科・コースだからこそ様々な意見が出て、最終的に発表が良いもののできたのではないと思う。しかし、自分が人コミとしての特徴を出して話し合いに参加できたか、と振り返ると、それは出来ていなかったように感じる。話し合いの進め方が、人コミの学生の間でする時は割りと状況の把握をしっかりとするが、今回の話し合いでは初めから問題について思いついたものを言うというスタイルで、その違いに戸惑いなかなか自分の意見を出すことができなかった。途中からは、段々ペースに慣れて自分でも意見を言えるようになったが、自分の専門を活かした提案という事から見るとまだまだだと思い、その点は今後の課題としていきたい。グループワークの大変さや楽しさを同時に知れたことは、これからの活動においてとても良い経験になったし、この授業を通して感じた地域の課題認識やグループワークにおけるギャップを忘れずに、これからも地域に目を向けた行動をしていきたいと感じた。(S. R)

■茨城県の現状や、抱えている課題について、その最前に立って対策や取り組みを行っている県庁職員の方々から直々に講義をしていただく機会というのはなかなかないことで、貴重な体験をさせていただきました。生まれてからずっと住み続けている地元ですが、県の課題について直視したり、考えたりと、自分たちが抱えている課題でもあるのにそれを意識する機会がほとんどなかったので、今回の講義を通して、自分の住む地域に対する意識や愛着の気持ちに少しずつ変化が生まれたように感じています。

今回の講義を通して一番感じたことは、県が様々な取り組みを行っているにも関わらず、私たち市民はその活動についてほとんど知らないということです。実際、講義でうかがったお話や、現地調査で実際見聞きしてきた事実を含めても、こんな取り組みを行っていたのか、と初めて知るものが多くありました。県から市民に対する情報発信や収集のあり方や、市民が積極的に地域課題の発見や解決に興味を持ち、取り組むこと、その促進をどう図るのか、県と市民が相互に関わり合って地域課題の解決に取り組める仕組みをどう形作っていけばいいのか、今後はそういったことについても考えていけたらと考えています。

地域の抱える課題の解決において一番重要なのは、そこに住む市民が地域の魅力に気づき、地域に愛着を持つこと、魅力を共有し、発信できるコミュニティづくりをすることであると思います。内の中で共有されている地域の魅力、良さというのは必ずあるはずですし、それをどうやって外の人々に発信するのか、アピールするのが課題であると、各班の発表を聞いて一番に思いました。また、発表でも述べたように、地域のコミュニティの希薄さ、交流の乏しさというのは、地域の衰退に大きく関わってくるものだと思います。これは社会心理的な視点から考えさせられたことでもありますが、地域に関心が向かなくなる、住んでいる地域の市民が互いについて関心や交流を持たなくなるというのは、その地域で長年受け継がれてきた、あるいは形作られてきた文化や伝統、歴史が無くなっていくということを意味します。これらのような長年培われてきたもの無しに地域の振興は望めません。情報化が進み、コミュニティのあり方について改めて考える必要が出てきた今だからこそ、人と人、人と地域のつながりについて、これからの時代どうあるべきなのか考えてみたいと思います。(F. K)



3年次前期「地域課題特論ⅡA」

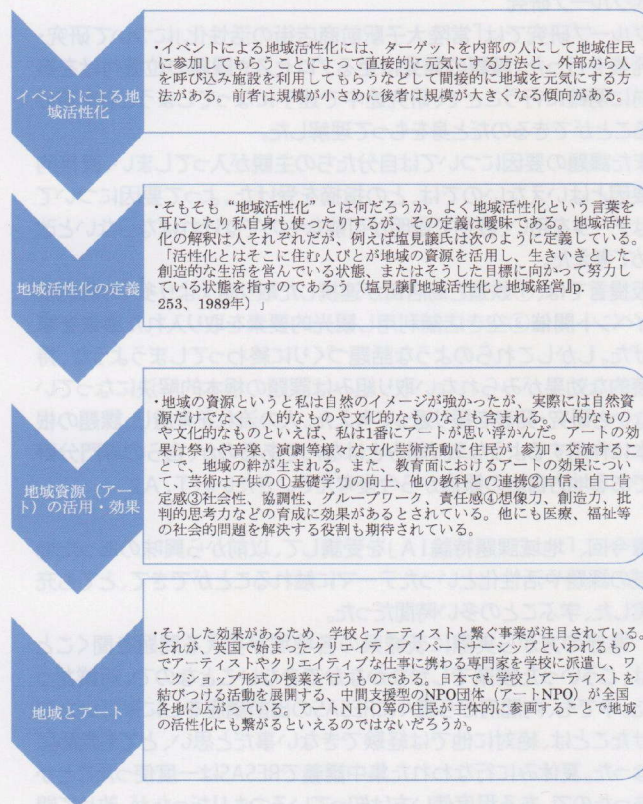
3年次前期「地域課題特論ⅡA」では、行政や企業等とは目的や方法が異なる「市民による」地域活性化の取り組みについて学ぶため、NPO法人や市民グループの方たちに講師になっていただいています。

今学期は、「常陸大宮市まちづくりネットワーク」代表で、デザイナーの倉田稔之さん、NPO法人シネマパンチ代表、水戸短編映像祭実行委員長の平島悠三さん、医療や介護の視点からまちづくりに取り組む「フロイデDAN」代表の寺門貴さん、「フロイデDAN」のメンバーでもあり、「きらきらタウン☆ひたちのおおみや」実行委員長の西村和也さん、K5 ART DESIGN OFFICE 代表、「あおぞらクラフトいち」主催の甲高美徳さん、にご自分たちの活動や取り組みについて講義いただいたあと、グループワークを行いました。

その後、学生それぞれに関心のあるテーマを決め、データ収集、現地調査、インタビューなどを行い、各自のテーマを掘り下げていきました。

最後に、経過や結論、提案、気づいた点などを整理し、まとめの発表を行って、講師の方々からアドバイスを受けました。

地域資源の活用について M



北茨城市の観光 S

イベント名	目的	きっかけ	規模・回数	運営主体	これから・課題
勝田 TA・MA・RI・BA 横丁 (JR 勝田駅前)	地元の人たちのたまり場を作る 第3の場の創出	イベントでにぎわいを取り戻すためのきっかけを作る	約30店舗出店 (約1/3が市民) 第2日曜日(第3回)	ひたちなかまちづくり株式会社 事務局員6名	駅前、ひたちなかの他の中心部でも横丁の出店を構想 収益の黒字化 価格や時間の設定
くろばね朝市	くろばねという地名を広めること	くろばねという地名が無くなり、旧くろばね地域が賑わいをなくしてしまったこと	約12~13店舗出店 (市民の参加や生鮮食品の販売もある) 第4日曜日(119回) 7・8月除く	くろばね商店会	現在使用している駐車場が使えなくなるので場所を移転するのか、朝市をやめるのか



コトコトファーム

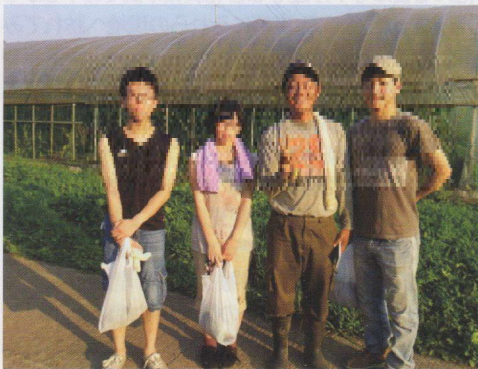
コトコトファームとは

常陸大宮市で、古東篤さんによって営まれている農園。無農薬と有機肥料にこだわって育てた野菜を、個人宅へ配達したり地域の飲食店などへ卸したりなどといった活動を行っている。

古東さんは、四国からの移住者で、初めはサラリーマンであった。雑誌などからの情報によって、将来的には農業に従事したいと考えていた。その後、奥さんの理解もあり、1年間の農業研修を経て、2011年5月に茨城の地にて新規就農した。

ヒアリング調査の結果

コトコトファームは、農園としての機能を担っていることはもちろんのこと、知的通所施設の利用者が就労実習する研修先にもなっている。実習生がコトコトファームで就労のための経験を積むことが



ぎ、また同時に、古東さんとしても、農園のスタッフの補充という点で助かっている。

また、地域という共同体の一員であるという意識を強く持っている。「コトコトファームから雇用を創出することで、常陸大宮市の若年層の人口が増加し過疎化に歯止めをかけることに少しでも貢献できたらよい」、「地域の飲食店や保育園にコトコトファームで育てた野菜を卸すことで、地域の経済を動かし活性化させたい」といった回答から、共同体の一員としての意識が読み取れる。実際に、古東さんは地域の消防団に入りその活動に参加するという行動にも表れている。

行政から受けられる、新規就農者への補助金制度があるということについて、古東さんは、就農してから知ったとのことであった。農業にかかる金銭的な負担を減らし、農業従事者を増やそうという目的で行われている制度が、周知にいたっていないという問題点も、今回のヒアリング調査では見受けられた。

イベントが持つ地域における意味と役割

- あおぞらクラフトいち -

1. 地域の問題点

地域が衰退する理由を、地域に住む人が「地域に期待していない・求めようとしていないこと」と仮定し、その改善策として人々がその地域に関心を持ち、好きでいることがまちの活気を維持・向上させるのではないかと。そして、イベントは住民を惹きつけ、かつ、まちの魅力を向上させる有効な方法の一つであると考え、地域活性化に結びついているのかみていく。

2. 水戸で行われているイベント

地域で行われる身近なイベントとして「あおぞらクラフトいち」を取り上げて考えていく。

あおぞらクラフトいち

水戸芸術館広場で年2回行われる作家によるクラフト展示即売会で展示・販売ブース以外にワークショップやライブなども行われる。

主催・運営は、水戸デザインフェス実行委員会で開催者は約1万人。

3. 運営側の思い

イベントや地域への思いを知るためにヒアリングを行った。

K5 ART DESIGN OFFICE 甲高美徳さん

まちづくりを「目的」として始めた訳ではなく、自分たちが楽しんで運営。最近では、「イベントに来てくれた人がまちに出て遊ばない」という思いも。

あおぞらクラフトいちには開始当時、まちづくりを目的としたものではなかった。しかし、イベントの人気や継続により、水戸や水戸芸術館の魅力の一角を担い、地域活性化の役割も果たしているということがわかった。

4. イベントが地域にもたらす効果

来場者・出店者が増えることでの観光収入や地域の認知度・向上に加え、イベントを通じた人々のつながりなどの効果がある。

5. まとめ・考察

イベントは、まちの魅力の主体であり、まちやまちの魅力を知ってもらう1つの方法である。特定の分野のイベントだけでなく、様々な分野が活動を盛り上げて互いに関連し合うことが、まち全体の魅力向上につながる。さらに、「イベントを行う」ということが、人々にまちへの関心をもたせるのではないだろうか。



茨城の特産品の取扱い — 茨城空港 —

N

1. 目的

茨城県は全国の中で産出額2位の農業を筆頭に産業が盛んであり、それに関連した特産品も多種多様である。しかし一方でPR下手という側面があるという話を2年後期の授業でうかがった。そこで、実際の商品を取扱う現場の話を書くことで茨城の特産品のPRにおける特徴や問題点を洗い出すことをこの調査の目的とする。

2. 茨城空港について

(1) 空港をフィールドとした理由

今回の調査において私は外部の人に特産品をPRしている現場を探していた。そのなかで外からやって来るお客さんにとって自然と目に入るであろう空港のアンテナショップに目を付けた。空港は地域と外部の人を結び付ける場として最適と考えたため、この茨城空港をフィールドに設定した。

(2) 茨城空港の概要

茨城空港は2010年3月に開港した茨城県小美玉市にある空港である。年間旅客数は約53.8万人であり、そのうち国内線が41.8万人、国際線が11.9万人である。また空港内のアンテナショップ3店のうち、茨城県の特産品を扱っていたのはSKY ARENA・亀じるしの2店であった。今回はこの2店を調査対象とした。

3. アンテナショップにおける特産品の取扱い

(1) SKY ARENA

小美玉市商工会が運営するお店で、小美玉市とその周辺自治体の商品を取扱う。扱っていた特産品としては主に日本のお客さんに人気の納豆やほしいものほか、漬物なども一部販売されていた。中国の方が買うのはチョコなどのお菓子類が多いそうだ。お客さんとしては日本の方のほうが多い。

(2) 亀じるし

菓子店のアンテナショップであり、こちらは主に茨城全域のお菓子を扱っていた。また、鉾田市の特産品に関するコーナーを設けていた。こちらのお店では、日本の方は主に茨城の名が入った銘菓を、中国の方はスナック菓子やチョコを買っていくことが多いそうだ。また鉾田市に関するコーナーは、茨城の魅力をより多くの方に理解してもらえるようにしたかったためとおっしゃっていた。

4. 2つのお店における特産品取扱いの特徴

店舗の調査により以下のことが言える。①どちらのお店も茨城をアピールしたいという思いで出店したため、茨城の特産品を盛んにPRしている。②日本の方はある程度積極的に特産品を買うが、中国の方はあまり買わず菓子類を買っていく様子である。そのことから今後は増加が見込まれる外国人客に対するPRが大事になるのではないかと感じた。

5. 感想・反省点

今回の調査において空港に伺った際、もっと明確な目的を持って調査に臨むべきだった。実際に行って写真をとるだけでは調査をしたことにならず、後で電話やメールなどで改めて企業の方に伺うこととなってしまったことは反省点である。また発表で指摘されたお客さんの目線も取り入れるべきだった。今後は実際に利用する当事者の目線に立つことも心がけたい。

北茨城市の観光 S

今回、地域課題特論IIという授業の中の様々な先生方のお話を通して、仕事とは別に、地域活性に向けてイベントを開くなどの様々な活動をしている方たちがいることを学んだ。お話を聞いている中で、私の地元、北茨城では先生方のような人たちがいるのだろうか、そもそも、観光などの現状はどのようにになっているのか疑問に思った。そこで、北茨城市の観光地・観光客の状況を把握しようと考え、調べることにした。

まずは、北茨城観光協会のホームページから何か得られるものはないかと検索した。観光地を見てみると、有名な六角堂、天心記念五浦美術館などの他にも石澤寺や浄蓮寺など北茨城市民でありながら初めて見る観光地があった。そこで、実際にそれらの現地へ訪れてみた。石澤寺への道は、とても狭く、標識もわかりづらかった。浄蓮寺や東林寺は山の方にあり、交通のアクセスが不便であると感じた。観光客は(観覧時間が過ぎてしまったこともあって)数えるほどで、六角堂や美術館に比べると知名度が低いのだという印象を受けた。

次に、北茨城の観光地に訪れる観光客数の現状や地域活性に携わる団体が存在するのか、北茨城市役所は観光に対してどのような姿勢なのかなどを知るために、北茨城市役所の根本さんにお話をいただいた。観光客数に関しては、震災後、風評被害などの理由から、震災前の数に達していないことがわかった。この問題への対応として、新たなイベントを開催するとともに、各地へ積極的にPR活動をしに出向いているようだ。新たなイベントの開催は未だ定着しておらず、イベント自体を知らない市民もいるようだが、参加人数は上昇傾向にある。また、イベントのひとつのノルディックウォーキングという、歩いて観光地を巡るイベントでは、道が狭く交通アクセスが悪いという北茨城の観光地の短所も、お金をかけて改善することなくうまく活用しているようだ。地域活性に携わる団体については、商工会は存在するがそのような団体はいないようであった。しかし、市役所が案を持ち込めば協力してくれる市民は多いということだった。北茨城市役所の姿勢は、市民向けと外向けの課がそれぞれあるようで、どちらに重点を置くということはないようだ。他にも、様々な質問をし、北茨城の観光状況が知ることができた。

今後の課題としては、倉田さんのお話やノルディックウォーキングの案のように、短所を長所に変える事例を調べ、創造性を高め、北茨城の観光地のもつ問題点の解決策を検討したい。また、市民は住みやすい市を望んでいるのか、それとも観光客を呼ぶことを考えているかなどを調査し、今後の北茨城のあり方について調べていきたい。



3年次後期「地域課題演習」

本プログラムの特徴は、「地域の課題に関心を持った学生たちがグループを作り、それぞれが専門に学んでいる知見を持ち寄って、その課題を総合的に探求する。地域に飛び込み、地域の人から学び、地域を動かす課題発見・解決力を身につける」ところにあります。

3年次後期「地域課題演習」では、これまで本プログラムで勉強してきた内容をふまえ、学生たち自身がグループを作り、「課題」を設定し、それに取り組むという段階に進みます。

本学年は、3人の学生でチームを組み、最終段階に進むことになりました。3人は担当教員も交えた意見交換を重ね、それぞれの専門分野での研究をふまえ、全員の関心が交差し、お互いの長所を活かして取り組める課題の選定を行っ

ていきました。

その結果、人口減少、少子化という課題に取り組むことにし、RESAS等を活用したデータ調査、茨城県の現状の分析などを行って、自分たちなりの提案を導くために、検討しました。

今学期の最終の発表(中間発表)では、「iターン」という課題を掲げましたが、この「i」には、「いばらき」の「i」を重ねたのだという説明がありました。

発表を聞いて下さった茨城県庁、企画課、県北振興課の職員の方たちから受けたアドバイスなどをいかし、本チームは、研究を続けます。

4年次前期「地域課題研究」へと進み、2016年7月には最終報告会で、本プログラムのまとめとして、「課題」解決のための提言を行う予定です。

目次

1. 課題の発見
2. 現在の取り組み
3. 提言と具体案
4. 今後の展開

1. 課題の発見

人口減少・少子化対策

- 結婚(婚活)支援
- 妊娠・出産支援
- 子育て支援

移住支援

移住者のデータ

▼出身者と移住者の割合

出身地	人数	割合
茨城県内	242	72.8%
茨城県外	91	27.2%
合計	333	100%

▼地方在住者の内訳

出身地	人数	割合
地方在住者	144	43.5%
都市在住者	189	56.5%
合計	333	100%

データより、

- ・Uターン政策はそれほど必要ない?
- ・iターンの増加に成功すれば結果Uターンも増加に繋がる?

→ iターンをもっと充実させるには!?

目指せi(いばらき)ターン!!

2. 現在の取り組み①茨城県

いばらきさとやま生活
茨城県 企画課 地域計画課 県北振興課が企画しているサイト、各地の市町村情報や暮らしに関連する情報などが紹介されている。

グリーンふるさと復興機構
財団法人グリーンふるさと復興機構のHP。「お話し田舎暮らし」や「田舎暮らし相談窓口」などが紹介されている。

...他にも様々な取り組みがなされていた!!

2. 現在の取り組み②島根県

iターン...都市から地方へ、逆戻りすればの出身地に、遠世代り世代戻りして移住する方たちの動きのこと

メリット:子育てが自然の多い環境でできる
地元民に受け入れてもらいやすい
住居の心配をしなくて良い
一暮らしにも多くのメリットがある

※iターンはあくまで「移住のきっかけ」
定住してもらうための子育て支援などの手厚い支援が必要

3. 提言①

つながりや馴染みの深い地域には、移住先の選択肢として候補に挙がりにくいのではないかと

↓

移住先の選択肢として挙がりやすくなるように、茨城県との接点をつくる

具体案①: 姉妹ふるさと化

- ・大都市の学校と地方の学校や自治体との交流
例 小学校: 田舎体験 中学校: 職業体験 高校: 短期バイト
- ・都内の農業高校等と協定校となり、学校行事としての茨城体験事業を履行→卒業後の就業先の候補に
- ・食品高校・調理学校・農業高校のコラボ

移住者の声(インタビュー)

古東真さん 茨城県常陸大宮市在住

「コトコトファーム」という農園を経営して、無農薬と有機肥料にこだわって野菜を育てている。輸入宅へ宅配したり、地域の飲食店へ卸したりなどしている。

古東さんは、四国からの移住者で、元はサラリーマンであった。1年の農業研修を経て、2011年に茨城で新規就農した。

雑誌を読んで農業への興味がわき、スローライフを書き読みたかったが、思い描いていたものと大きく異なる現実にも直面し、方針をたてるまでにひとりで努力することは大変であったという。

3. 提言②

- 移住に対する不安の解消
- 住民と上手にやってくる不安...知り合いがいないとない...

↓

- 住民や他の移住者との交流の場を提供!
- ・交通の便が悪い...
- 自転車や自動車の貸し出し・レンタル!

具体案②: 移住シェアハウス

- ・移住者共通のエリアに住ませることで、移住に関する不安や悩みを解消。シェアハウスに地域住民を呼んだりイベントを行うことで交流もできる。
- ・シェアハウス自体に興味がある人もターゲットになる。また、シェアハウス内で出会った男女が結婚しようというメリットも、一結婚目的の層にも有効!
- ・3年程度で卒業する制度を設けたりすることで、途切れない移住者が入れられるようにする。
- ・移住者の様子やブログ等で知らせることでPR

課題

- ・担い手をどうするか?
- ・シェアハウスは置かれるのではないかと(若い人向け)?
- ・移住後のフォロー(継続的支援)

5. 今後の展開

移住者の移住目的は様々...

↓

移住者の目的や生活に合わせた移住を!

茨城県は目的別に移住できる地域!

県北...農業中心、自然豊かな生活をしたい人
県南...東京にも通勤しやすい
県西...海釣りや釣り、漁師になりたい etc.

ご清聴ありがとうございました

4年次前期「地域課題研究」

3年次後期の研究を継続し、4年生は、前期の本授業において、本プログラムのまとめを行います。

各班による整理、まとめ、発表準備ののち、7月22日に最終報告会を行いました。

これまでこの学年の指導に当たって下さってきた市民の講師の方々、2年次の学生が報告会に出席し、講評やコメントをしました。

4年生の5つの班の発表タイトルは、

- ①「最高の梅祭りの再興！」
- ②「大子町の過疎について本気で考えてみた—子育ての側面から—」
- ③「男だらけの熱血少子化対策提言」
- ④「茨城県の新規就農者を増やせ—目指せ250人—」
- ⑤「可能性は無限大、なめんなよ西の内紙」

4年生は、報告会の後、各班の提言について、まとめを行ったほか、個人のレポートも執筆し、本プログラムを終えました。

大子町の過疎について本気で考えてみた
—子育ての側面から—

大子班
井上 川和 菅澤
高柳 山賀 山田

大子班

目次

- I. 研究課題
- II. 過疎地域について
- III. 大子町について
- IV. 聞き取り調査
- V. アンケート調査
- VI. 提言①～③
- VII. まとめ

I. 研究課題

- ・茨城県でも過疎化が進行している大子町
- ・大子町の現状を知り、大子町の人口がこれ以上減らないようにするにはどうすれば良いかを考える

II. 過疎地域について

1. 過疎地域の定義

過疎とは...

人口の多いに比べて少ないに比べて地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域

< 過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律 >

- ・【過疎地域市町村】
過疎地域市町村は、過疎法第2条第1項及び第32条の適用される要件に該当する市町村
- ・【過疎地域とみなされる市町村】
過疎地域市町村を含む合併による新市町村は、過疎地域市町村の要件・過疎地域とみなされる市町村の要件ともに該当しない場合でも、その新市町村のうち合併前に過疎地域であった旧市町村の区域は過疎地域とみなされる（過疎法第33条第1項）
- ・【過疎地域とみなされる区域のある市町村】
過疎地域市町村を含む合併による新市町村は、過疎地域市町村の要件・過疎地域とみなされる市町村の要件ともに該当しない場合でも、その新市町村のうち合併前に過疎地域であった旧市町村の区域は過疎地域とみなされる（過疎法第33条第2項）

II. 過疎地域について

2. 過疎の要件

- ・人口要件
一定期間の間の人口減少率、高齢者率、若年者比率の変化で判断される
- ・財政力要件
地域の需要に対して収入の割合が低い

III. 大子町について

1. 大子町の概要

年	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005
人口	38,210	37,067	35,908	34,792	33,891	32,973	32,051	31,129
出生率	12.9%	12.4%	11.9%	11.4%	10.9%	10.4%	9.9%	9.4%
死亡率	10.3%	10.6%	10.9%	11.2%	11.5%	11.8%	12.1%	12.4%

・一人当たりの町民所得
206.5万円（平成23年度）

・財政力指数
0.33

III. 大子町について

2. 大子町の過疎の位置づけ

・過疎地域、みなし過疎、過疎地域を含む自治体の合計797

・大子町は、過疎地域の中でも状況が悪い

・特に、少子化が進行している

大子町	割合（全国平均）	（過疎率）	順位
15歳未満の割合	9%	(13%)	(11%)
15～64歳の割合	54%	(62%)	(55%)
65歳以上の割合	37%	(25%)	(34%)
財政力指数	0.33		207/797

III. 大子町について

3. 前回の報告から

- ・大子町の住民は生活自体には困っていない
- ・地域のつながりが強く、不便さを補っている
- ・雇用がない、賃金が低いことを気にする人が多い

—大子町に雇用創出すれば人口が増え過疎から脱却できるのではないかと考えていた...

IV. 聞き取り調査

1. 地域おこし協力隊の皆様

- ・協力隊と住民の意識（想い）の違い
- ・やる気のある人はすでにやっている
- ・危機感を与えるためには何をすべきか
- ・中間世代を大事にするべきではないか
- ・都会の人と田舎の人のマッチングする人の存在
- ・新しい人が来る場所がない
- ・活性化だけでは足りない（幸せな消滅）
- ・外部からの視点をしっかり伝える
- ・町に還元する方法

IV. 聞き取り調査

2. 大子町役場様

- ・人が、特に若い人がいない
- ・大子町を義務教育の9年間実施する
- ・企業誘致は行っている
- ・しかし、大子町の地形や自然に制約を受ける
- ・大子町ならではの誘致を行いたい。
- ・茨大農学部との調査では、高齢者は趣味を、若者は、就業を求めている。
- ・一企業誘致して雇用を生み出すのは難しいのではないか？

IV. 聞き取り調査

3. 大子町の住民の皆様

常陸県YOSAKOI祭にて

- ・教育・過疎については問題だと思っている子供には大子町で就職してもらいたくない—ほかの町に比べて経済が、人が少なく多様な産業に出会えない、子供が少なすぎて遊ぶ場所がない、自分がかつて通っていた学校がなくなっている、学校が遠く送り迎えをしなくてはいけなかった仕事の両立は難しくなる（女・介護職）
- ・母子家庭についての支援が弱い。（女よここ連盟委員会） 時間が短く仕事の両立が難しい。

V. アンケート調査

1. 概要

- ・目的 前回の聞き取りで子育て世代が多く不満や不安を抱えていることが分かった。
- ・対象 大子町立大子中学校三年生の保護者
- ・回答数 67/81

V. アンケート調査

2. 結果

問：大子町は子育てしやすいまちだと感じますか？

■子育てしやすい ■子育てしていない ■どちらでもない ■わからない

37人

- ・大子町の子育ての良い点
自然が多い、地域のつながりがある
- ・大子町の子育て課題
①医療の充実
②雇用の場の創出
③教育施設（習い事、図書館、交流）の充実
- 子育てしやすいと考えている人は多いがその人たちのなかでも課題を抱えている人は多い

V. アンケート調査

2. 結果

しかし他の町に住んでほしいと考える割合が多い！理由として働く場がない、賃金が低い、視野を広げてほしい

V. アンケート調査

3. アンケート結果から

子育てしやすいと感じる人は多い

しかし！

働かないから他にまちに住んでほしいと思っている人が多い

解決策として企業誘致！
しかし自然保護、土地の問題などでほぼ無理...ならば

住む＝大子町
働く＝週でも良い

子育てするために（戻って）来てみたくなる魅力ある大子町を目指す！！

たとえば...

- ・Aさんは大子町出身。
- ・都内の大学に進学
- ・茨城県で働きたいと思い水戸市の企業に就職し水戸市のアパートに住んでいる。
- ・めでたく職場結婚
- ・第一子出産

ここで水戸市ではなく自然豊かな大子町で子育てしたいと思えば、大子町に住んでほしい。

VI. 提言①

大子町の自然や食を存分に活かした学校づくり

- ・地域連携給食
農産物直売所、畜産牛、ローズボーク、リンゴ、メロン、とんかつ、お餅
- ・大子の食材を使った調理実習
4年生～5年生... 野菜の収穫体験
6年生... クラスで一緒に調理実習
一学年別給食の準備や調理実習の準備
- ・自然を活かした体験学習
公民館、自然観察、観察日記、お花見、お祭り

VI. 提言②

子育てしながら働きやすい環境づくり

- ・空き家を利用した預かり保育
おじいちゃん、おばあちゃんに手伝ってもらって遊びなどを教えてもらう
- ・放課後イベントの充実 親が仕事終わるまで
- ・コンパワトビレッジ
医療機関や教育施設などの集中を図る
- ・交通機関を使う人へ金銭補助

VI. 提言③

大子町の子育ての課題として「人と人の交流の機会を少なさ」が挙げられる

茨城大学集講義「大子学」の創出

茨城大学生が講師、大子町の空家に住みながら子どもと交流する。

教育学部、理学部、人文学部等から募集し子どもたちに勉強を教え、大学生も大子の課題について考える講義

まとめ

- ・課題
過疎化が進行する大子町
- ・大子町の人口がこれ以上減らないようにするにはどうすれば良いか？
- ・結論
人口が減ってしまう一番の要因は雇用がないこと
→ しかし、企業誘致は難しい
→ 住みやすさを強化して人口減少を食い止める

ご清聴ありがとうございました！

大子班

I. 研究課題 / II. 過疎地域について

私たち大子班は茨城県の過疎地域の調査をしてきた。特に茨城県のなかでも過疎化が進行している大子町を中心に調べることを決め、町民の方に聞き取り調査等を実施してきた。私たちは研究課題として、まず大子町の現状を知り、大子町の人口がこれ以上減らないようにするにはどうすればいいのかを中心に考えてきた。

まず過疎地域の定義についてだが、過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律によれば、人口の著しい現象に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域とされる。次に過疎地域と定義される要件だが、大きく分けて二つあり人口要件と財政力要件がある。人口要件とは一定期間の間の人口減少率、高齢者比率、若年者比率の変化で判断され、また財政力要件とは地域の需要に対して収入の割合が低いかどうかに基づいて判断される。この要件に当てはまれば、過疎地域市町村となり、さらに一定の要件を満たすことで過疎地域とみなされる市町村、過疎地域とみなされる区域のある市町村に区別されることになる。

III. 大子町について(大子町の概要、大子町の過疎の位置づけ、前回の報告から)

Iで述べたように、茨城県内でもっとも過疎が進行しているのが大子町であることがわかった。人口は、昭和60年には28,230人いたが、年々減少を続け、現在は19,060人までに達している(国勢調査より)。年齢別人口割合では、15歳未満の割合がおよそ9%、65歳以上の割合がおよそ40%にまで達している。全国的に見ても(全自治体数1727)、15歳未満の割合が下位125位、65歳以上の割合が上位194位と、少子高齢社会であることがわかった。

IIで紹介した「過疎地域」、「過疎地域とみなされる市町村」、「過疎地域とみなされる区域のある市町村」は、全国に797あるとされている。大子町は、それらの各過疎地域のなかでも状況が甚だしく、なかでも少子化が進行(他の地域と比べ15歳未満の割合が特に低い)していることが明らかになった。

前回、大子町への視察の結果をまとめた。そこでは、大子町の住民は生活に困っていないこと、地域内のつながりが強く、それが不便さを補っていること、さらに大子に雇用が無いことや賃金が低いことを気にしている人がいることを報告した。以上から、私たちは「大子町に雇用を創出すれば、人が増え過疎から脱却できるのではないか」と考えていた。

IV. 聞き取り調査

上記の考えから、大子町で働く方、地域活性化のために活動している方として、地域おこし協力隊様、大子町役場様、地域住民様からお話しを伺った。

【地域おこし協力隊】

- ・協力隊と住民の意識(想い)の違いがある
- ・危機感を与えるためには何をすべきか
- ・中間世代を大事にすべきではないか
- ・都会の人と田舎の人をマッチングする人の存在
- ・新しい人が来る場所がない
- ・活性化だけではない(幸せな消滅)
- ・外部からの視点をしっかり伝える

【大子町役場】

- ・人が、特に若い人がいない
- ・大子学を義務教育の9年間実施する
- ・企業誘致は行っているが、大子町の地形や自然に制約を受ける
- ・大子町ならではの誘致を行いたい。
- ・茨大農学部調査では、高齢者は趣味を、若者は、就業を求めている。
- このことから、企業誘致して雇用を生み出すのは難しいのではないかと考えた。

【地域住民(常陸国YOSAKOI祭にて)】

- ・教育・過疎については問題だと思っているが子供には大子町で就職してもらいたくない
- ほかの町に比べて低賃金、人が少なく多様な価値観に出会えない、競争心が育たない、自分が子育てで苦労したため同じ思いさせたくない、学校が遠く送り迎えをしなくてはいけないため仕事の両立は難しい(女、介護職員)
- ・母子家庭についての支援が弱い。(女、よさこい運営委員会)

V. アンケート調査

聞き取り調査から子育て世代が多く不満や不安を抱えていることが分かった。そのため、現在の大子町を支えている親世代と大子町の将来を担う子どもたちの考えを知ることを目的にアンケート調査を実施した。

〈目的〉現在の大子町を支えている親世代と大子町の将来を担う子どもたちの考えを知り実態を把握する

〈対象〉大子町立大子中学校三年生の生徒(81名)の保護者

〈調査方法〉各担任教師による配布、回収

〈実施期間〉2015年7月6日(月)から7月14日(火)

〈調査内容〉保護者の意識、家族形態、今後の展望、就業場所

〈有効回答数〉67/81

〈アンケート結果まとめ〉

大子町は子育てしやすいと感じる人は多いが、職がないから他の町に住んでほしいと思っている保護者が多いことがわかった。

解決策として企業誘致が考えられるが、自然保護や土地的制約からほぼ不可能だと結論づけた。そのため、子育てするために(戻って)来て住みたくなる魅力ある大子町を目指すことにした。

VI. 提言

子育てしたくなるような大子町を目指し、以下の三つの提言をする。

1. 大子町の自然や食を存分に活かした学校づくり

- ・地産地消給食の推進
- 奥久慈しゃも、常陸牛、ローズポーク、リンゴ、メロン、こんにゃく、あゆを使った大子町でしか食べることのできない給食を出す。

・大子町の食材を使った調理実習

学年ごとに異なる食材を作り、育て、食の大切さ、おいしさを実感できる。

1年生～3年生…野菜やそば作り 大規模な畑を利用

4年生～5年生…あゆの住める環境づくり(川の清掃、養殖見学)

6年生…クラスで一匹しゃもを育てる

→1年に何回か全学年のすべての食材を使った調理実習

・自然を活かした体験学習

水辺観察、星座観察、植物観察、水ロケット、大規模アスレチックなど、豊かな自然でのびのび遊びながら学ぶことができる。

2. 子育てしながら働きやすい環境づくり

・空き家を利用した預かり保育

おじいちゃん、おばあちゃんに手伝ってもらい、昔の遊びなどを教えてもらう。

・放課後イベントの充実

親が仕事終わるまで、放課後YOSAKOI等に参加する。

・コンパクトビレッジ

医療機関や教育施設などの集中を図る。人々が自然に中心部に集まるような仕組み作り。

・交通機関を使う人へ金銭補助

3. 茨城大学集講義「大子学」の創出

大子町の子育ての課題として「人との交流の機会の少なさ」が挙げられる。そこで、茨城大学生が1週間、大子町の空家に住みながら子どもたちと交流する。教育学部、理学部、人文学部等から参加者を募集し、子どもたちに勉強を教え、大学生も大子町の課題について考える講義を創出する。

まとめ

私たちは、大子町の過疎について考えてきた。課題として、過疎化の進行にあたり、これ以上大子町の人口が減らないようにするにはどうすればいいのか、ということも掲げた。

調査を進めるにあたり、人口減少の一番の原因は雇用がないことであり、企業誘致が一番の解決策だと考えてきた。しかし、大子町の自然や地形に制約を受けてしまう。そこで私たちは大子町の過疎という現状を逆手に取った三つの提言をし、住みやすさを強化し大子町ならではの方法で人口減少を食い止める、という結論を導いた。

4年次前期 地域課題研究



目次

1. 現状
2. 課題
3. 原因
4. 解決策
5. 検証（西の内紙ワークショップ）
6. 提言

1-1 西の内紙とは？

- ◆常陸大宮市で生産される**茨城県唯一**の和紙
茨城県の**指定無形文化遺産**！
- ◆西の内紙の歴史は古く、
水戸黄門自ら「西の内紙」と命名
➢「大日本史」編纂用紙として用いられる
➢明治から大正にかけて、
選挙投票用紙は西の内紙と指定



1-ii 西の内紙の現状

- ◆和紙の生産を続けている家が2軒
- ◆和紙職人の数が少ない
五介和紙：3人
紙のさと：2人
- ◆知名度がない
(茨城県民も知らない人が多い)

1-iv フィールドワーク

- ◆西の内紙生産者意見交換会
第1回 西の内紙の特徴と強み、和紙の世界遺産登録の影響、生産者2軒の現状、需要拡大に向けて
第2回 西の内紙利活用について、生産現場の視察
- ▶モノマチセブン
「街」と「ものづくり」の二つのテーマを融合させたイベント

2 西の内紙の課題

- ◆需要不足
➢身近でない
➢西洋紙の方が使い勝手が良い
➢知名度の低さ
➢安価で大量生産できる和紙の普及
- ◆後継者不足
➢職人さんが少ない

3-i 原因① 身近でない

- ◆芸術家の方の「素材」としての利用がほとんど
- ◆一般の人が使いやすい商品・活用方法が少ない
- ◆入手経路が限られている

3-ii 原因② 西洋紙の方が使い勝手が良い

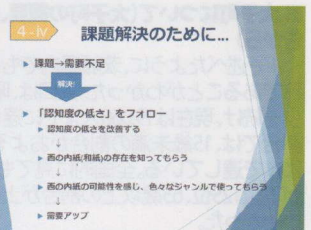
- ◆印刷に向かない
(繊維があり、でこぼこしている)
- ◆消耗品ではない
(西洋紙に比べて高価である)

3-iii 原因③ 認知度の低さ

- ◆統一された規格・規定がない
(西の内紙としてのブランド力が低い)
- ◆触れる機会が少ない
- ◆日常生活で使うような商品や活用方法が無い
- ◆広報力が低い

3-iv 原因④ 安価で大量生産できる和紙の普及

- ◆機械漉きの和紙と手漉き和紙との違いがわかりづらい
- ◆高価な手漉き和紙よりも安価な和紙
(手漉きとの違いがわかっていてたとしても安価なほうを購入してしまう)



4-ii 解決策 認知度の低さ

- ◆西の内紙の規格の作成
- ◆広報力を強化
- ◆新商品の開発
➢他に先駆けたもので差別化
➢注目をされる
➢ふるさと納税での活用
Ex. 一筆箋、受領証明書等
➢特産品とのコラボ (広域連携の視点)



5-i 検証 ワークショップの開催

◆西の内紙ハンドメイドワークショップ

日時：2015年6月30日 (水) 12:30~14:00
場所：茨城大宮図書館第一階 インフォメーションラウンジ

- ▶目的 茨大生に西の内紙に触れる機会を提供し、認知度の向上を図り、和紙の必要性などについて考えてもらう
- ▶内容 髪飾り、アクセサリー、しおり、封筒など自由に作成。西の内紙の紹介、アンケートの実施



5-ii 検証 ワークショップの開催

- ◆アンケート結果 参加者 (回答者)：20名
- Q、和紙のどんな商品があれば買いたい、使いたいですか？
⇒アクセサリー、レターセット、照明、財布など
- Q、和紙は今後必要だと感じますか？
⇒思う：20人 思わない：0人
日本の伝統文化→後世に伝えていくべき

5-iv 検証結果

- ◆ワークショップは、
・和紙ならではの活用法の広がり
・新たなアイデアの発掘
・参加者だけでなくSNSを通じた認知度の向上
・和紙について考えてもらうきっかけ
→課題解決の手段の一つとして有効

ワークショップでのアイデアから

- ▶ワークショップの参加者から出た意見
➢浴衣・着物→和物と小物はありましたが、アパレルはあまりない
➢和紙は水分や湿気の吸収に優れている
➢汗などを吸ってくれる→夏に穿る浴衣としては最適
➢「たとう紙」は洋服にも活用も出来る
- ▶意見交換会にて
➢和紙の食器→「WASARA」が既にあるが高価で使い捨て
➢西の内紙にはコネクタを混ぜて作る植栽紙がある
➢漆で何層も使えるようにする
➢軽くて丈夫なためアウトドアでも使える

6-i 提言① 和紙のアパレル(紙布)

- ▶消費性や調湿性は綿やウールより高く、さらさらとしている
➢浴衣等の和装はもちろん、インナーにも最適
- ▶紫外線カットの効果もあり
➢帽子や日傘(服用の)カーやカーディガン
- ▶水分を吸い取る力も強い
➢折り畳み傘カバー、ペットボトルカバー
➢頻りに使うものであるが紙布は丈夫なので可能性はある

6-ii 提言② 和紙のグッズ(強靱紙)

- ▶軽くて丈夫、水にも強い
⇒パーヘキュール用にお皿、コップ、テーブルクロス等をセットで売り出す
⇒コースターやコップは、濡れたり温度が変わったりする時に色や模様が変わると面白いかも
- ※紙布の商品も強靱紙の商品も、デザイン性が売ればさらにGOOD!!

6-iii 提言の補足①

保存団体の結成!!

- ▶ユネスコの世界遺産に登録された和紙
⇒保存団体あり
- ▶新商品の開発への協力
- ▶西の内紙の規格決め⇒ブランドとして売り出す
- ▶広報力の強化
- ▶ワークショップの開催

6-iv 提言の補足②

ワークショップの開催を継続しよう!!

- ▶主催者：保存団体
- ▶活動資金：参加費、補助金、寄付金
- ▶対象：常陸大宮市民から徐々に拡大
- ▶広報：SNSで参加者に拡散してもらう
行政に広報面で協力してもらう
⇒参加者以外にも認知度が広がる仕組みづくり
- ※ワークショップでは認知度も高められ、良い意見・アイデアも見つけられる。新しいものを生み出すためにも、継続は必要。

ご清聴ありがとうございました

和紙班

西の内紙とは？

西の内紙は常陸大宮市で生産されている茨城県唯一の和紙である。また、茨城県の指定無形文化遺産にも指定されており、県内ではその価値が認められていると言える。

西の内紙の歴史は古く、水戸黄門が「西の内紙」と命名したと言われている。大日本史の編纂用紙として用いられた歴史がある。また、明治時代から大正時代にかけては選挙投票用紙として指定されていた。

西の内紙の特徴

軽くて丈夫で、水に濡れても強く破けにくい、紫外線カットの効果があり、生産者の方のお話によると、約98%の紫外線をカットするという高い効果があるようである。また、湿気を吸収する力がある。この二点に関しては、今後科学的に調査を進める予定である。

西の内紙の現状

現在、和紙の生産を続けている家は常陸大宮市の五介和紙と紙のさとの2軒である。和紙職人は2軒合わせて5名であり、生産者不足が深刻化し

ている。また、茨城県民でもその存在を把握していない人が多く知名度が低いこともうかがえる。

・フィールドワーク

私たちは西の内紙の現状や課題の把握のため、2回の西の内紙生産者意見交換会への参加とモノマチセブンの視察を行った。

第1回意見交換会では西の内紙の特徴と強み、和紙の世界遺産登録の影響、生産者2軒の現状、需要拡大に向けた話し合いを行った。

第2回目では、西の内紙利活用について、生産現場の視察を行った。

モノマチセブンとは、「街」と「ものづくり」の二つのテーマを融合させたイベントであり、ものづくりが地域の活性化に果たす役割について考察するきっかけとなった。

・西の内紙の課題

フィールドワークを通して、主に2つの課題が挙げられた。1つ目は西の内紙の需要が低いこと。2つ目は後継者不足。私たちはその中でも西の内紙の需要不足に着目し、その原因と解決策について考察した。需要不足の原因として以下の4つの点が考えられた。

第一に身近でないこと。芸術家の方の素材としての利用がほとんどであり、一般の人が使いやすい商品・活用法が少ない。また、常陸大宮の店舗まで買いに行かなければ手に入らないことから入手経路が限られているといえる。

第二に西洋紙の方が使い勝手が良いこと。西の内紙は繊維があり、素材に凹凸があるため印刷に向かない。また、一つ一つ手作業であるがゆえに西洋紙よりも高価であり、消耗品ではない。

第三に知名度が低いこと。西の内紙には統一された規格・規定がないためブランド力が低い。また、触れる機会が少ない、広報力が低いこともその要因と考えられる。

第四に安価で大量生産できる和紙が普及したこと。これは、生産者の方から伺った話であるが、和紙と手漉きの和紙との違いが素人にはわかりづらいために安価な和紙がより普及したという。また、そのつがいがかかっていたとしても安価な紙を購入してしまう。そのために西の内紙の需要は減ったと考えられる。

・課題解決のために(解決策)

課題の需要不足を解決するため私たちは「認知度の低さ」の改善を考えた。まずは、西の内紙の存在を知ってもらい、実際に触れる機会を提供することでその可能性を感じ、幅広いジャンルで利用してもらおう。そうすることで需要のアップを図れないかと考えた。

認知度の低さの解決策として、西の内紙の企画の作成、広報力の強化、新商品の開発を挙げる。新商品開発のねらいは他に先駆けたものを開発することで西の内紙の差別化をし、注目を集めることである。また、ふるさと納税において、一筆箋や受領証明書等に使用することで活用の場をひろげたり、地元の特産品とコラボしたりすることも挙げられた。

そして、認知度の低さを改善するために、ワークショップの開催を企画した。これにより、認知度のアップ、また和紙の活用法について新しいアイデアの獲得を目指した。

・ワークショップの開催

2015年6月30日に茨城大学図書館一階インフォメーションラウンジをお借りして西の内紙ハンドメイドワークショップを企画した。この企画の目的は、茨城大学生に西の内紙に触れる機会を提供し認知度の向上を図るとともに、和紙の必要性などについて参加者に考えてもらい、私達自身も参加者からアイデアを得ることである。ワークショップの具体的な内容は、常陸大宮市で西の内紙を生産されている紙のさとから購入した西の内紙とその他のパーツ材料、作成見本などをこちらで用意し、参加者に髪飾り、アクセサリー、しおり、封筒などを自由に作成してもらった。また、ワークショップ終了後に参加者にアンケートをとり、和紙を用いた商品の具体的なアイデアや、和紙の必要性について、必要だと思うかなど質問に答えてもらった。和紙は今後必要だと思いますか。という質問には、回答者20人中20人全員が必要と答え、意外な結果となった。日本の伝統文化であるから、後世に伝えていくべきであるという意見が多く、一般の人にも残していきたい思いはあることがわかった。ワークショップに参加した感想として、実際に和紙に触れてみて参加前と感じ方が変わったという意見や、和紙がいろいろなものに活用できることを知ったなどの意見が上がった。

実際にワークショップを開催してみた結果、ワークショップでは和紙の使い方の新たなアイデアが生まれ、活用法に広がりやすくなった。また、参加者からSNSを通じて、さらに情報を拡散することも期待でき、認知度の向上につなげることができると考えられる。さらに、参加者が実際に現物を目にし、触れてもらうことで、和紙について考えてもらうきっかけにも

なると考えられる。

以上のことからワークショップの開催は今後の課題解決にむけた一つの手段として有効であると考えられる。

・ワークショップでのアイデアから

検証結果から、ワークショップは認知度を高める手段にもなるが、そのワークショップで出たアイデアを検討し、新たな商品として売り出した。新たなアイデアを提供したりすることで需要にもつながっていくと、私たちは考えた。

まず、私たちが行ったワークショップから出た意見である。「和紙を浴衣や着物に使ったどうか」という意見が出たので、検討してみた。和紙を使った和の小物はありそうだが、和紙で作られた衣類はあまり見かけない。その上、和紙は吸湿性に優れているので、汗などを吸ってくれるため、衣類としては最適だと考えられる。また、着物などを和紙の畳紙で保管するが、畳紙は消臭目的でもあるため、和紙の衣類には消臭効果も期待できる。

次に、私達も参加させていただいた意見交換会で出た意見を検討してみる。ここでは、「和紙の食器」というアイデアが出た。すでに「WASARA」というものがあるが、こちらは高価なのに使い捨ての商品となっている。西の内紙にはコンニャクを混ぜて作る強製紙というものがあり、洗って何度も使えるようにできれば、WASARAとの差別化も測れると考えた。

・提言

上で検討したことから、まず和紙のアパレルを提言する。こちらは紙布の視点から説明をする。消臭性や吸湿性は綿やウールよりも高く、さらとした手触り、着心地であり、昔から紙布は夏の衣料として使われていた。その特徴から、浴衣などの和装はもちろん、インナーにも最適であると考えられる。また、紫外線カットの効果も高いので、帽子や日傘にも応用できる。夏用のパーカーやカーディガンにするなら、紫外線を気にする女性にも人気が出るはずである。また、アパレルとは言えないが、紙布の高い吸湿性を考えて、折り畳み傘カバーやペットボトルカバーへの応用もできると考える。日常的に使えるものなので、需要にもつながりやすい。

紙布はアパレルだけではなく、医療や産業用としても使える。その上、ウールや綿などほかの素材と組み合わせることで、さらに可能性は広がると考える。

次に、強製紙の視点から、和紙のグッズを提言する。強製紙は軽くて丈夫であり、水にも強いので、アウトドア用にお皿やコップ、テーブルクロスなどを売り出したらいのではないかと考える。また、コースターやコップは、濡れたり温度が変わったりする時に色や模様が変わると面白い。マグカップなどでは既に類似品はあるが、和紙で出来たら話題性は抜群であると考えられる。

和紙はもともと障子紙などの生活雑貨にも用いられていたのだから、芸術品の素材としてではなく、原点に戻ると考えて、雑貨として進化していくことが重要なのではないかと考える。また、紙布の商品も強製紙の商品もデザイン性が高ければさらによいものができると思う。

・提言(補足)

一つ目は保存会の結成である。2014年にユネスコ世界文化遺産に登録された和紙にはいずれも保存団体が存在していた。さらに、何らかの遺産登録の際にも、生産者よりかは保存団体が主体となっていることが多くある。そこで、西の内紙にも保存団体を立ち上げてはどうか。新商品開発時だけでなく、西の内紙の規格を決定するときや、ブランドとして売り出していくときにも保存団体が必要になると考えられる。また、広報力の強化にもつながると思われる。生産者の方は和紙の製造に本腰を入れることができ、保存団体メンバーがホームページを立ち上げれば、広く広報することも可能である。

二つ目は、私達が開催したようなワークショップを継続である。今回は私達が中心となって開催したが、今後は保存団体が主体となって活動していくことを考えている。活動資金については、参加者や、行政などからの助成金、寄付金で賄っていく。参加対象者としては、まずは市内の人を対象とし、徐々に拡大していく。そのためには広報には特に力を入れて行く必要があると考えている。参加者にもSNSなどを用いて情報の拡散に協力してもらい、その際には、何かしらの特典を付けるなど、拡散に繋がる工夫を施すことを考えている。また、行政の方々にも協力をお願いし、参加者以外にも認知が広がる仕組みづくりをしていく。以上のように、ワークショップでは、認知度も高められ、良い意見・アイデアも見つけることができると考える。新しいものを生み出すためにも、継続的に開催することを提案する。

4年次前期 地域課題研究

「西ノ内和紙ハンドメイドワークショップ」企画書

○概要

私たちは茨城大学で開講されている「地域課題特論ⅡB」の受講者で構成されたチームです。常陸大宮市の特産品である西ノ内和紙の需要を増やし、地域の活性化の一助となることを目指し活動しています。その意活動の一環とし、「西ノ内和紙ハンドメイドワークショップ」というイベントの開催を考えています。

○目的： 茨城大学の学生へ西ノ内紙に触れる機会を提供し、魅力を伝える。認知度の向上、需要増加を図る。

○開催候補日： 6月30日（火）

○予定時間： 12:00~14:00（120分）

○場所： インフォメーションラウンジ（図書館1階）

○募集対象・人数： 茨城大学生・20名程度（最大30名）

○参加費： 無料

○備考： 入退場自由

○内容

常陸大宮市の特産品である西ノ内和紙を用いた作品作り。現段階でしおり、ブックカバー、置き飾り、香り袋、髪飾り、ネクタイピンなどを検討中。その他、用意してある材料を用いて参加者に自由に創造してもらう。参加者には、西ノ内和紙の認知度やワークショップの感想等アンケートに回答してもらう。

○タイムスケジュール

10分 西ノ内和紙についての紹介（PPT使用）

100分 ワークショップ 用意してある材料を用いて作品作り

10分 片付け、掃除、退場

○実行委員名簿 茨城大学、人文学部 4年

溝江若菜

佐藤麻里

高橋諒

星野由季菜

清野純

西の内紙ハンドメイドワークショップ参加者アンケート

- ① 西の内紙を知っていましたか？ （はい・いいえ）
 ② ①で「はい」と答えた方はどこで知りましたか？ （ ）
 ③ 和紙を使いたい、買いたいと思いますか？ （はい・いいえ）
 また、どのような商品があれば欲しいと思いますか？

- ④ 和紙は今後必要だと思いますか？理由も含めてお願いします。

- ⑤ 今回西の内紙(和紙)に触れてみてどうでしたか？(イベントの感想も含めて)

ご協力ありがとうございました。

西の内紙ハンドメイドワークショップ参加者アンケート(参加者20名)

- ① 西の内紙を知っていましたか？

はい：6人

いいえ：14人

- ② はいと答えた方はどこで知りましたか？

- ・常陸大宮市国際交流プログラム(豪の青少年との国際交流)
- ・友達とラインで
- ・観光で
- ・講義で
- ・地域課題入門
- ・地域課題特論

- ③ 和紙のどのような商品があれば買いたい、使いたいと思いますか？

- ・和紙のレターセット：3人
- ・かんざしやヘアピン、イヤリング等のアクセサリー：6人
- ・ろうそくやランプを入れるもの：2人
- ・ほし：1人
- ・浴衣や和服関連：1人
- ・マスキングテープ：1人
- ・財布：2人
- ・工夫しており、細かいもの：1人
- ・葉が入っているもの：1人
- ・筆箱：1人
- ・特になし：8人

- ④ 和紙は今後必要だと思いますか？(理由も含めて)

思う：20人

思わない：0人

- ・普通紙にはない特性を後世に残すといから
- ・日本の伝統文化は後世に残すべきだから
- ・後世に伝えていくためにも和紙は使われていくべきだから
- ・きれいだから
- ・丈夫なところがいいから
- ・かわいいし、需要があると思うから

和紙で ハンドメイド

西の内紙
ワークショップ

和紙を使ったハンドメイドワークショップを行います！

私たちは「地域課題特論ⅡB」で常陸大宮市の地域活性化のための活動をしているチームです。

常陸大宮市の「西の内紙」を使って、小物やアクセサリーなどを作ってみませんか？
和紙の可能性は無限大！！参加費は無料です！ぜひ遊びに来てくださいね！！(*^▽^*)

日時：2014年6月30日（火）12:00~14:00（入退場自由）

場所：図書館1階インフォメーションラウンジ

参加費：無料

※事前の申し込みは不要です。直接ご来場ください。

こんな作品が作れます！



しおり
香り袋
髪飾り
ピアスなど

↓お問い合わせはこちらまで！



図書館
学生
生協

さざなみ
coffee

ココロ

茨城県の新規就農者を増やす
目指せ250人

地域課題研究農業班
小野瀬 奥田 後藤 高橋 西内

農業班

茨城農業改革大綱(2011-2015)

茨城農業改革大綱(2011-2015)によると、39歳以下の新規就農者数の目標水準は、年間 **250人**



東地域域の現状

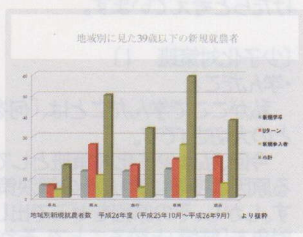
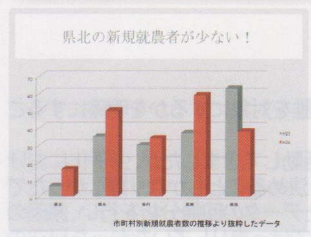
- ・ 耕地が平野(平野)で水田等の圃場整備もすすんでいる
- ・ 東茨城等の大規模農地にも積極的に従事。転売地でも有利
- ・ 普通作農家も転売農家も比較的大規模化が促され、一戸当たりの経営面積も大きくなっている

↓

中小規模の農家(特に小規模農家)は、自分で経営するよりは耕地を他の大規模生産者に貸し付ける傾向へそのため新規就農者数は減っている

↓

新規就農者数は今後も横ばいになる予想される



県北地域の現状

- ・ 山間地であり、非効率である(大規模化が難しい)
- ・ 水戸に近い。わざわざ県北でやる必要性がない
- ・ 消費者が近くない
- ・ 新規就農者を受け入れてくれる農家が少いため、研修も不可
- ・ 県で移住政策を行っているが、うまく行っていない

↓

他の地域に比べて新規就農者数が少ない

目標値

年間目標: **20人**

その理由としては、

- ・ 10世帯の新規就農者の平均人数10人からみると
- ・ 250人達成のための不足人数はおよそ50人のため、5世帯それぞれ10人増加すれば達成となるため

PLAN1 世代交代補助金

◎新築字交・リターン就農者の確保
39歳以下の農家の後継者に対して就農開始から10年間ほど補助金を支給する

(案)
世代交代が2世代続けば年間10万円、3世代目は年間15万円
予算: 年間300万円

PLAN2 耕作放棄地借り上げ

県北の耕作放棄地を行政が借り上げて就業希望者に期限付き(5年など)で無償で貸し付ける。
既に耕作放棄地を集積する農地中間管理機構があり活用されているが、その利用率は全国で5割に留まっている。もっと周知を進めるべきである。
期限付きでも無償で貸し付けをすることで耕作放棄地も減少し、新規就農者の土地探しや地代の問題も緩和できる。

農地中間管理機構

茨城県では平成26年4月より開始、農林振興公社が担当。

PLAN3 県北の新商品作物

山間部の自然豊かな地域での栽培に適しており、大量生産大量消費(薄利多売)に向かない作物
特定の取引先、流通などで需要がありそうなもの

(例)
生薬: 漢方薬の原料、薬膳料理の材料
→ 具体例は配布資料に

- 耕作放棄地への作物導入事例として
1. そば
 2. なたね
 3. 大豆
 4. 山菜類
 5. 放牧
 6. 茶
 7. 果樹
 8. マコモダケ
 9. さつまいも
- 農林水産省作成の冊子より

- 県北地域で既に推進されている作物等
- 主食用米
非主食用米
麦・大豆
そば・なたね
野菜
花き・花木
果樹
地方特産作物
農産加工品
などを中心に推進されている
地域農業再生協議水田フル活用ビジョンより

ご静聴ありがとうございました!

農業班

20150701

農業班 資料

茨城農業改革大綱(2011-2015)によると、39歳以下の新規就農者数の目標水準は、年間250人。

各地域の現状

県北

- ・ 他の地域に比べて新規就農者の数が少ない
- ・ 山間地であり、非効率である(大規模化が難しい)
- ・ 水戸に近い。わざわざ県北でやる必要性がない
- ・ 消費者が近くない
- ・ 新規就農者を受け入れてくれる農家が少いため、研修も不可
- ・ 県で移住政策を行っているが、うまく行っていない

県南

- ・ 新規就農者の数が他の地域に比べて多い(39歳以下)
- ・ 消費地(東京、つくばなど)が近い
- ・ 産地形式が多い
- ・ 「つくば」という地域ブランドがある(イメージが良い)
- ・ 担い手が少なくなり、農地が余っている

県東

- ・ 39歳以下、40～65歳以下ともに新規就農者の数が多い
- ・ 小美玉町、茨城町、ひたちなか市など、比較的大きな農業法人や大きな農家(ハシイモ)

がまだ残っているため、リターンが多い

県南

- ・ そもそも、大きな農家が多い。良い土地の奪い合いがある
- ・ 新規参入者が入り込むのは難しい

県西

- ・ 元々農家の数が多いため、リターンの数は多い
- ・ しかし、交通の便が悪い。新規参入者が少ない(県のある自治体の新規就農相談数は多いが、他の地域で減らない)
- ・ 普通作農家も転売農家も比較的大規模化が促され、一戸当たりの経営面積も大きくなっている
- ・ 中小規模の農家(特に小規模農家)は、自分で経営するよりは耕地を他の大規模生産者に貸し付ける傾向となり新規就農者数は減っている

地域別新規就農者数 平成25年度(平成25年10月～平成26年9月)

地域	39歳以下			小計
	新規字交	リターン	新規参入者	
県北	6	6	4	16
県東	13	26	11	50
県南	13	16	5	34
県西	14	19	26	59
県中	11	20	7	38
計	57	87	53	197

茨城県の農業問題は以下の2点である。担い手の減少と高齢化、そして耕作放棄地の増大である。私たちは、前者の「担い手の減少と高齢化」に着目し、39歳以下の新規就農者を見ることにした。また、茨城農業改革大綱にも若年新規就農者の確保が課題として挙げられていた。しかし、新規就農者の数のデータが見つからなかったため、39歳以下の新規就農者の数から離農者数を差し引いた数を「定着者数」と定義し、全国各都道府県と比較することとした。比較した結果、茨城県は全国でワースト3位という結果になり、39歳以下の新規就農者の増加が課題とわかり、私たちは「茨城県の若年新規就農者を増やすこと」を目的とすることとした。

茨城県は39歳以下の新規就農者の数の目標を年間250人としている。しかし実際は200人前後と目標に届いていない現状である。茨城県の地域別に現状を分析していくと(茨城県農林振興公社や各地域の事務所のヒアリングによる)まず、県南地域では、39歳以

4年次前期 地域課題研究

下の新規就農者の数が他の地域に比べて多い、消費地(東京、つくばなど)に近い、直売所形式が多い、「つくば」という地域ブランドがある(イメージが良い)、担い手が少なくなり農地が余っているという現状がわかった。そして、県央地域では、39歳以下、40~65歳以下ともに新規就農者の数が多く、小美玉市、茨城町、ひたちなか市など、比較的大きな農業法人や大きな農家(ホシイモ)がまだ残っているため、Uターンが多いという現状がわかった。

次に鹿行地域では、大きな農家が多いため、良い土地の奪い合いがあり新規参入者が入り込むのは難しいという現状がわかった。県西地域では、耕地が平野で水田等の圃場整備が進んでいる、東京等の大消費地にも距離的に近く、販売面でも有利である。普通作農家も園芸農家も比較的大規模化がはかられ、一戸当たりの経営面積も大きくなっているという現状がわかった。

そして最後に県北地域であるが、他の地域に比べて新規就農者の数が少ない、山間地であり、非効率である(大規模化が難しい)、水戸に近い、わざわざ県北でやるメリットがない、消費者が近くにいない、新規就農者を受け入れてくれる農家が少ないため、研修も出来る環境がない、そもそも人口が少なく、県で移住政策を行っているが、うまく行っていないという現状がわかった。

従って私たちは茨城県の中でも「県北地域」の39歳以下の新規就農者の数を増やす政策提言をすることにした。そして、県北の新規就農者の目標値を年間20人と設定した。20人としたのは、県北地域の10年間の新規就農者の平均人数が10人であるため、倍の数でキリが良いこと、茨城県の新規就農者の目標が250人であり、現在約50人が不足しているため、5つの地域で分けると10人増加することで達成されるためである。

そこで私たちは対策をいくつか考えた。PLAN1は世代交代補助金である。新規学卒者とUターン就農者の確保が目的で39歳以下の後継者に対して支給します。PLAN2の耕作放棄地借り上げでは、既に農地中間管理機構が存在するが、周知が進んでいないので利用率は5割に留まっている。PLAN3は県北で新しい商品作物を開拓することであるが、その一例として特定の取引に特化し、高単価が見込める漢方薬の原料や薬膳料理の材料をあげる。

これら3つの提言で新規就農者が増加するのではないと私たちは考えた。

少子化対策班

[少子化対策班 K]

・講義を終えて

今回、大学1年の集中プログラムからはじまった地域課題の総合的探究プログラムの最後、地域課題演習を無事に終えることができました。始めた当初は、まさかこんなにも長期にわたって行われていくとは考えておらず、振り返ってみてもよくここまで続けてきたという達成感が自分の中では非常に感じられました。また、講義を通していくうちに、自分の中で大きな変化があったと感じました。

その1つとして、今回の講義は全体を通してみても自分1人だけで行うものではなく、誰かとグループを組んで行う講義が多く、他の人との協調性が非常に重要だということを改めて実感することができました。1つの課題に対し、複数人で意見を出し合いながら、協力して課題解決に取り組み、1つの目標にたどり着く姿勢というものが大いに培われたと感じます。この力は、学生だけに必要なものでなく、社会に出て会社という大きな1つの組織に自分が入った場合でも非常に重要なことであると考えています。大学よりも広い分野の人々が集まる社会の中で、今まで以上に様々な意見や思想の持ち主が多くいると考えています。その中で周りの人と協力して物事を進めていく上では、協調性は非常に重要視される項目です。その重要性を今の学生という立場の中で改めて実感することができ、これからの自分の行いをより良いものにしていくためのきっかけを、講義全体を通して学ぶことができ、非常に濃い講義内容だったと感じています。来年から自分が働いていく組織の中で、今回の地域課題プログラムで培った力を活かしていければと考えています。

2つ目として、私は地域課題プログラム全体を通して地域に存在する多くの課題というものに触れてきました。今までの自分では、1つの課題に対し多くても2~3個程度の原因が関わってきているのだろうと安易に見積もり、それを解決しようと行動してきました。しかし、現実それはそれよりも深刻で1つの課題に対して複数の原因が存在し、ま

た、その原因を起こす複数の要因が関わってきているなどと、1つの原因を解決するだけでは問題を根底からは解決できないという状況が非常に多くありました。講義を進めれば進めるほどそれが顕著に表れ、非常に苦しみことも多々ありました。このことから、1つの課題だけでも複数の原因、それを起こす要因が密接に関わってその課題を成しており、自分達の視野をこれまで以上に広げていかなければ課題の解決には到底たどり着けないことを理解しました。この考え方をこれから課題に取り組みるときには常に持ち、社会に出てからの自分達の行動、また、卒論という一つの課題に対しても活かしていけたらと考えています。

[少子化対策班 I]

・学んだこと

私がここで学んだことは、「何を・誰を対象にするかを明確にすることの大切さ」です。

今回、私は少子化対策班として活動してきましたが、少子化における原因は多岐に渡り、その解決策を決めることもかなり難しかったです。しかし、その原因をゼミで出したデータの回帰分析を行い、原因の対象を「結婚」と絞ることで、それまでではっきりしていなかった研究の道筋を明確にすることが出来ました。また、解決策を考える際にも、「誰に向けた解決策であるか」というように対象をしっかりと絞ることで、その解決策に具体性を持たせることが出来ました。

もちろん、先生方の助言あってのものですが、私たちに明確な対象を定めたことは研究を進める上で、すごく大切なことなのだと思ふことが出来ました。

・これからに向けて

今後、卒論を進めていく予定ですが、対象をしっかりと定め、具体的に分かりやすい卒論を書けるようにしていきたいと思ふます。

また大学を卒業し就職してからも、仕事に活かせるようにしたいと思ふます。自分は卒業後、自治体職員として働きたいと思ふています。そのため、公共サービスの提供をしながら、市民の幸福度の向上・住民福祉の拡充に努めていくつもりです。それには、住民のニーズやサービスの行き届いてない現状をしっかりと把握・理解して、その対策に向けたアプローチをしていく必要があります。そこで、この講義で学んだことである「対象の明確化」をして、その対象のニーズに適し、かつ有効的なサービスの提供の実現に邁進していけたらと考えています。

[少子化対策班 T]

私は「地域課題の総合的探究プログラム」を受講し、茨城県の文化や課題に向き合い、また知識を深めてきた。そして、私はこのプログラムを通して学んだ経験を、卒業後に生かしていきたいと思ふている。

私は卒業後の進路として地域の金融や公務員を志望し、就職活動に励んでいる。この2つの共通点は、地域に貢献することが出来るという点である。この2つのうちでも、今は公務員を第1志望と考えている。理由は、より茨城県に貢献し、プログラムで得た知識や経験を生かせると思ったためである。

私は少子化班として3年の後期から4年前期までの1年間活動してきた。少子化は日本全国共通の課題であり、過疎化や地方衰退にもかかわらずくる大きな問題でもある。もし、志望通り公務員となることが出来た際には、ここで得た各自治体が行う婚活への取り組みや、逆に効果が薄くであろう取り組みについての意見や、年齢層やターゲットを絞った細やかな取り組みなどを提案するなどして、ここで得た経験を生かしつつ貢献していきたいと思ふ。

また、金融等の職業に就いた場合、顧客とのコミュニケーションが大事になってくる。その点において、このプログラムで得た様々な茨城の文化への知識は役に立つと考えられる。自分自身が経験した常陸大宮の和紙や、地域コミュニティに役買っているバンホフカフェのこと、更には、他の班の発表で知った梅祭りや西の内和紙など、その地域や文化に関心のある人物と会話する際には、大いに自分を助けてくれるだろうと思ふ。

最後に、このプログラムを通して多くの茨城についての情報を得ることが出来た。その内容は課題や問題点、風習・文化など様々であったが、どの取り組みもその地域や茨城を発展・復興に向けた活動である、と私は感じた。今後、どのような職に就いたとしても、この意識を常にもち、少しでもここで得た経験を発揮できそうな場面に巡り合うことが出来たら、積極的に参加し、茨城に貢献していきたいと考えている。



まとめ

2012年度にスタートした人文学部「地域課題の総合的探求プログラム」は、2015年前期に4年次生の最後の必修科目「地域課題研究」を開講し、第1期の修了生を送り出すことになりました。

この学年の学生は、授業内容の組み立て、学生たちによる自主的な取り組みなどにおいてもパイオニアとして歩んでくれました。

学生たちの奮闘と成長に対し、いっしょに歩いてきた担当教員として、心からの賛辞を送るとともに、社会に出てから彼らがこのプログラムで学んだことをそれぞれの現場で活かし、さらに学び、活動してくれることを願います。

本プログラムは、本当に多くの方たちのお力を借りています。

県庁企画課 および、県北振興課をはじめとする県庁のみなさま

常陸大宮市(市民協働課)

常陸大宮市のみなさま

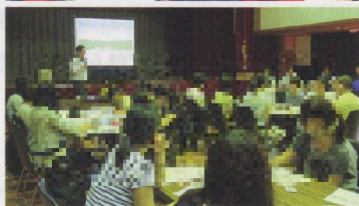
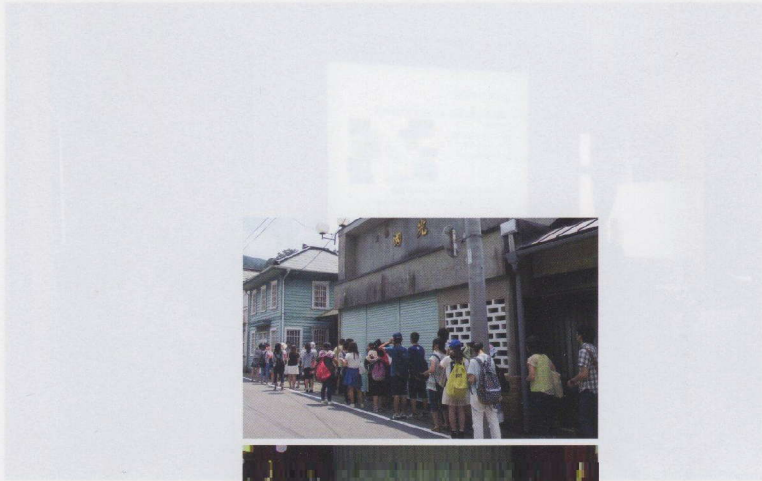
(常陸大宮市まちづくりネットワーク、森と地域の調和を考える会、ウダーベ音楽祭実行委員会)

内閣府まち・ひと・しごと創生本部

にお礼申し上げます。

そのほかにも、授業で、また、学生たちの調査や研究において、ころよくご協力くださり、学生たちをともに育てて下さった、さまざまな分野のみなさま、地域のみなさまに、深く、感謝いたします。

今年度は、各授業で、提供が開始になったデータベース「RESAS(地域経済分析システム)」の使い方を学んでもらい、それに基づいて地域の現状を把握・分析し、課題の解決方法を見出していくように指導しました。学生たちは新しいシステムの使い方をすぐに身につけ、活用していました。地域の課題に取り組む際、こういった新しい情報・資料の利用や、プレゼンテーションの能力、知識なども必要になっています。本プログラムでは、そのような部分もフォローしつつ、地域のみなさまから学び、地域にはいっていく学生たちを育てていきたいと思えます。引き続き、ご指導をお願いいたします。



地域課題の総合的探求プログラム

担当教員

茨城大学人文学部 井上拓也 西野由希子 兪和 小原規宏

2016年3月31日発行 茨城大学人文学部

連絡・お問い合わせ 茨城大学人文学部 西野研究室 TEL/FAX 029-228-8128 yukiko.nishino.xiye@vc.ibaraki.ac.jp